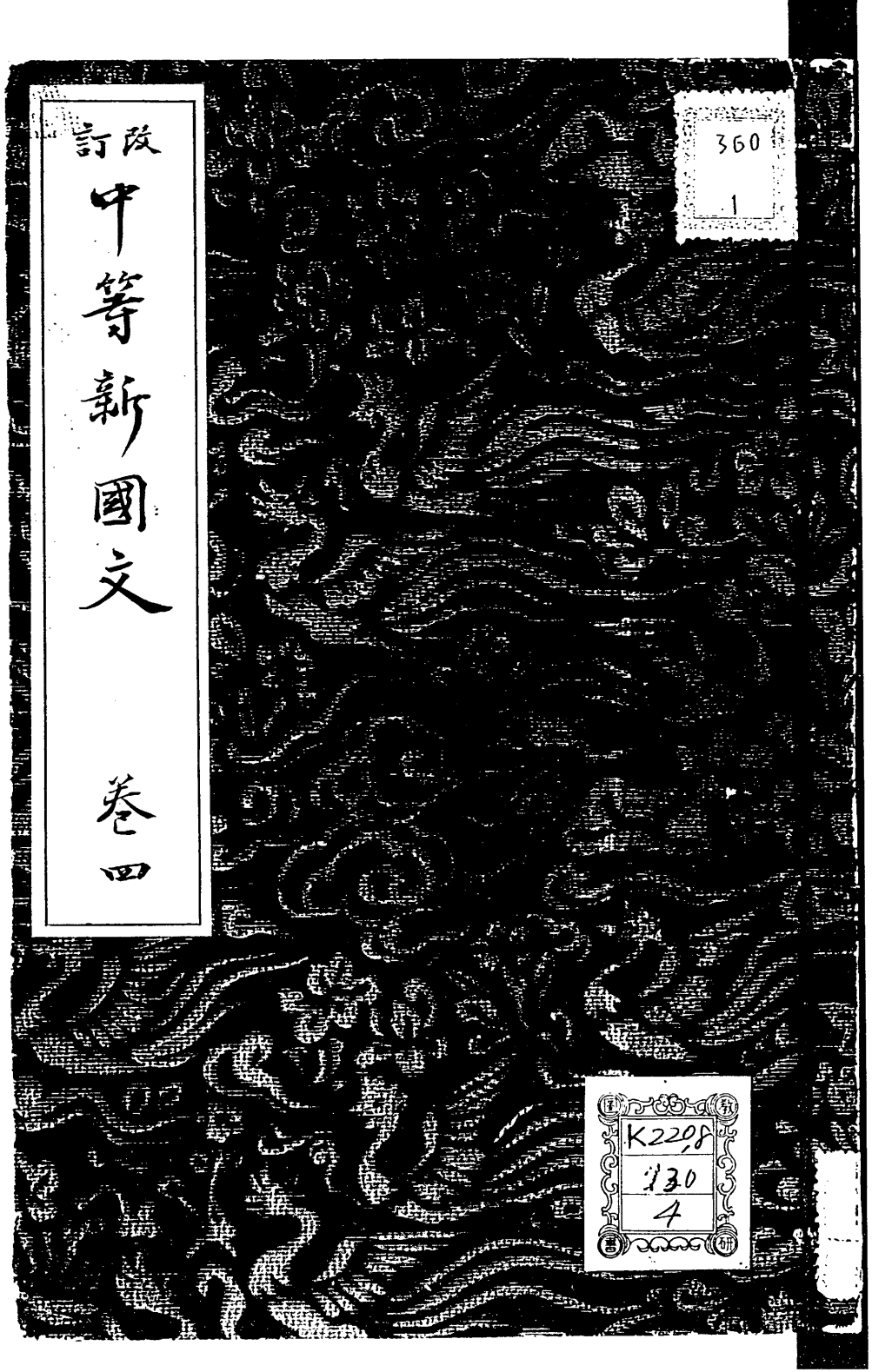
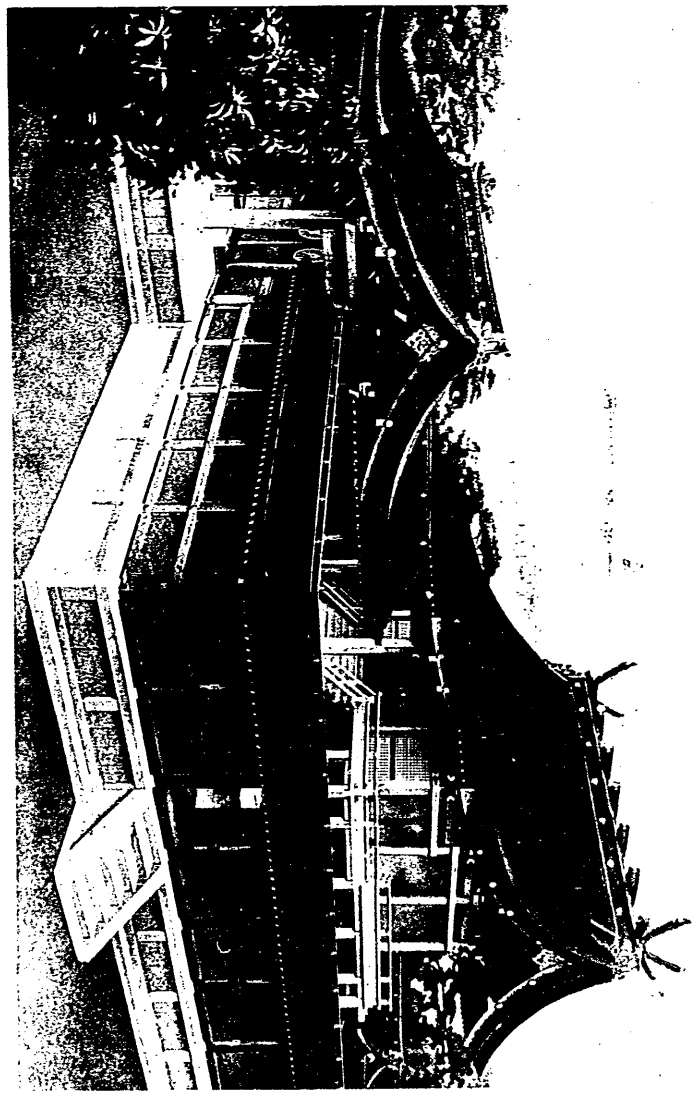


K220.8
130
4

露光量調整、重複撮影



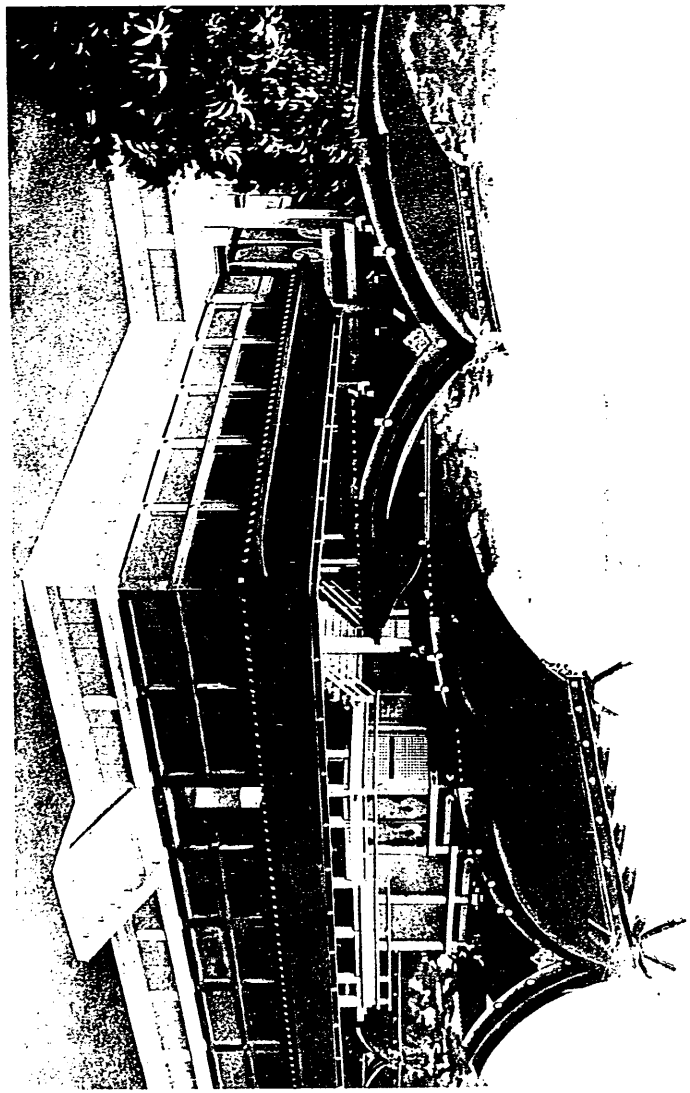
殿本宮神治明

中等新國文

東京帝國大學文學博士 藤村作
文學士 島津久基 共編

東京 至文堂

露光量調整、重複撮影



殿本宮神宮明

東京帝國大學文學博士 藤村作
文學士 島津久基 共編

改訂 中等新國文

東京 至文堂

昭和改正

改訂 中等新國文 卷四

目次

一 故郷……正岡子規……一
二 澄心雜記……高須芳次郎……六
三 阿閉掃部……室鳩巣……一一
四 神社と國民……伊東忠太……一五
五 明治神宮……溝口白羊……二〇
六 月よみの光（近世現代短歌）……（諸家）……二三
七 伊賀の旅……吉田絃二郎……二七
八 武藏野……國木田獨歩……四七
九 落葉する頃……相馬御風……五五

一〇 蘆庵と君平……瀧澤馬琴…六二
一一 村の思ひ出……加藤武雄…七〇
一二 開墾小屋……白鳥省吾…七五
一三 哲人聖德太子……高島米峰…七八
一四 月雪花……芳賀矢一…八五
一五 不斷の努力……八波則吉…九三
一六 清淨の國……大町桂月…九八
一七 賴宣卿行狀記……矢田挿雲…一〇三
一八 我が袖の記……高山樗牛…一一四
一九 柳生但馬守……新井白石…一一七
二〇 土に親しめ……薄田泣菫…一二三
二一 國史に還れ……德富蘇峰…一二六
二二 爆擊……林野民三郎…一三〇

二三 信長と勝家……正宗白鳥…一三九
二四 造化のたくみ……土井晚翠…一四三
二五 樹の根……和辻哲郎…一五一
二六 死して惜しまるゝ人となれ……嘉納治五郎…一六四

目次終

改訂中等新國文　卷四

正岡子規
名は常規
俳人
歌人
愛媛縣松山市生
明治三十五年歿
年三十六

一　故郷

正岡子規

世に故郷ほどこひしきものはあらじ。花にも月にも、喜にも悲にも、先づ思ひ出でらるゝは故郷なり。故郷は學問を究め、見聞を廣くする地にはあらず。されど故郷には歸りたし。故郷は事業を起し、富貴を得る地にはあらず。されど故郷には住みたし。兩親姉妹あるが爲に故郷に歸りたしと思ふもあらん。我は親、同胞ともに故郷にはあらね

ど、なほ故郷こそこひしけれ。都にありて世を厭ふが爲に故郷に住みたしと思ふもあらん。我はさまでに世を厭ふふしもなくて、猶故郷こそこひしけれ。想へば十餘年の昔、はやり氣の抑へ難くて、單身故郷を出でゆかんとこそは勇みしか。いざ首途といふ際に、一點の熱涙は覺えず頰のあたりを流れ來るを、見送の人に見せじと顏背けたる時の苦しさ、何やらん胸につかへたる心地なりき。母親の乳房と故郷の土とは離れうきものなり。

學生時代の子規

故郷近くなれば、城の天守閣こそ先づわが目をよろこばす種なれ。低き家、狹き町、寂しき繩手、丈高き稻の穗、鼻のさきに並びたる連山、をさなきころより見馴れたる一軒家、見るもの皆莞爾として我を迎ふるがごとく、一としてなつかしからぬはなし。まづ身よりの家を此處彼處と音づれて久濶の情を叙ぶれば、年老いたる婆々樣、瘦せたる叔父御、肥えたる叔母御、よく居眠する下女の顏さへ見覺えたるまゝに少しも變らず。さて變らぬは故郷よと思ふも、歸り着きし瞬間なり。

山家

變らぬはめでたけれど、全く變らでは何の面白き事かあらん。變り行きたるこそ、なか〳〵に聞きて、見て、ゆかしけれ。人の上

兒髷「チゴマゲ」十二三歲の少女の髮の結ひ方頭上に高く左右に輪を作る

唐黍「タウキビ」タウモロコシの異名

につきて第一に變りたるは、わが從弟妹のいたくも成長したることとなり。「都の人こそ來たまへれ。われも其の顏見ん」などひしめきあひ、わが前に跪きて禮を述ぶるもあれば、襖の隙よりはづかしげに窺ふもあり。をさなきは、はじめて見たる顏もあり。さらぬも、おもかげばかりはもとのままにて、振分髮の、兒髷に變りたるも少からず。かつて見し時には、小學讀本を高らかに讀上げて誇らしげに人に聞かせたる男の子の、今はもはや海陸軍を談じ、外國の形勢を說く程になりたるもあり。唐黍の殼などもて拵へたる雛を箱の上に並べて、まゝ事に餘念なかりし女の子の、嫁入すべきほどになりて、わが膝もとに茶を汲みて置きながら、顏もえあげて退きたるなど思へば、彼方よりは我をもしか年とりたりと見るらんと、獨り心に恥づること多かり。

戸の外に出づれば、「何縣士族寄留」といかめしく標札せる家どもの、大方は聞知らぬ人の名を示して、中にも陸軍出仕の人々多く見受けらる。幼き時より馴染になりし本屋は昔のさまながら、見なれぬ丁稚は我を十年前の華客とも知らで、よそ〳〵しくもてなしたるも本意なく覺ゆ。豫て知りたる道具屋は引越ししか、潰れしか、あらぬ店となりて、寂しかりし武家町の角に料理屋の軒を並べたるもあいなしや。いで菩提所に詣でて、久しぶりに樒にても手向けんと辿りゆけば、山門なかば崩れて、一條の汽車道は其の傍を横ぎれり。あまりの變化に驚きてすこし左に曲れば、數百の墓累々として立てり。父君などの墓のうしろには、一歩な

らぬに粟黍など秀てたり。一目見るより覺えず目をしばたゝきぬ。

粟の穗のこゝを叩くなこの墓を

嬉しきは故郷なり。悲しきも故郷なり。悲しきにつけても嬉しきは故郷なり。

（子規隨筆）

二　澄心雜記

高須芳次郎

高須芳次郎
文學者
評論家
大阪市の人

芭蕉
姓は松尾
俳人
伊賀の人
元祿七年歿
年五十一

俳人のうちには、芭蕉の「古池や蛙とびこむ水の音」を月並式の句だとして斥けるものが少くないやうだが、私はさう思はない。極く靜かな廢園の池を眼の前に見て默想に入る時、ふと、蛙が池に飛び込んだ音を聞いて我に歸る。何か知らんが、そこにある一つの靈覺があるやうに感ぜられる。

すべて道に入り、眞の生命を求めんとするものには、默想が必要である。それには一切の雜音を避け、孤獨を守つて心耳を澄ます靜かな場所にをらねばならぬ。和光同塵の悟道に入つた人ならば格別、でなければ、やはり天地すべて靜寂に歸したやうな淨境にゐたい。さうした所で一向に趺坐して思ひを永遠に馳せてゐる際、蛙が池に飛び込んだ水音を聞くと、確かに何物かを暗示されたやうに思ふに違ひない。芭蕉の「古池や」の句は、かうした意味に於て捨て難い氣がする。

高須芳次郎

芭蕉の「荒海や佐渡に横たふ天の川」の句は誰れも雄渾、豪

宕の趣があると嘆賞を惜まない程に有名であるが、私は此の句から一種の宗教的感銘を見出す。寧ろ私に取つては限りない悲壯、沈痛の趣を魂の上に感ずる。芭蕉は「銀河序」の一文に於て、この句がどうして作られたかを明かにしてゐるが、それを見ると、單に雄渾とか、豪宕とか言ふだけの趣を表現しようとしたのではない。それ以上の意味を含んでゐる。

芭蕉は此の句の由來に及んで、「北陸道に行脚して、越後出雲崎といふところに泊る。かの佐渡ケ島は、海の面十八里、滄波を隔て東西三十五里に横ほり伏したり。みねの嶮難、谷の隈々まで、さすがに手に取るばかりあざやかに見渡さる。むべ、この島はこがね多く出でて、あまねく世の寶となれば、限なきめでたき島にて侍るを、大罪朝敵のたぐひ、遠流せらるゝによつて、ただ恐ろしき名の聞えあるも、本意なき事におもひて、窓押開きて、暫時の旅愁をいたはらむとする程、日既に海に沈んで月ほのぐらく、銀河半天にかゝりて星きらきらと冴えたるに、沖のかなたより波の音しば〳〵はこびて、魂削るが如く、腸ちぎれて、そぞろに悲しび來れば、草の枕も定まらず。墨の袂なにゆゑとはなくて、しぼるばかりになむ侍る。」と述べてゐる。

芭蕉が「魂を削るやうだ」と言ひ、「腸がちぎれて袂をしぼるばかりだ」と言つてゐるのによつて、いかに彼がその夜の空と海との光景に對して、限りない悲痛を感じたかがわかる。私は曾てある冬、北越地方に旅して、汽車の窓から日本海を

見たことがあるが、少年時に久しく瀬戸内海などに親しんで來た私に深い寂寞と悲愴な感じとを與へた。それは冬の時期であつたからでもあらうが、在來見た海の晴れやかさとは違つて、何とも言へぬ淋しさが、ひろがつてゐるやうに思つた。その淋しさのうちに日本海に於ける獨自の趣があると言へよう。

芭蕉が秋夜、怒濤が吼えてゐる暗い海の上に銀河を仰いで、悲しみに打たれたのは自然の情緒の發露である。この悲しみは、一面に於て、自然の偉大な魂に對する人間の小さな魂の律動だとも言へよう。かうした悲しみのうちに私等の宗教的感情が強く起る。即ち超自然の絶對的靈力の象徴としての銀河を芭蕉がしみ〴〵打仰いだ時、人間の弱小を感じないではをられなかつたらうと察せられる。それと同時に絶對存在の根本生命に對する憧憬が深く起りはしなかつたらうか。私は「荒海や」の句に於て、いつもかうした感じを起すのである。

（現代隨筆大觀）

三　阿閉掃部

室鳩巣

室鳩巣　名は直清　世に駿臺先生と稱す　徳川幕府の儒官　江戸の人　享保十九年歿　年七十七

秀康　家康の第二子

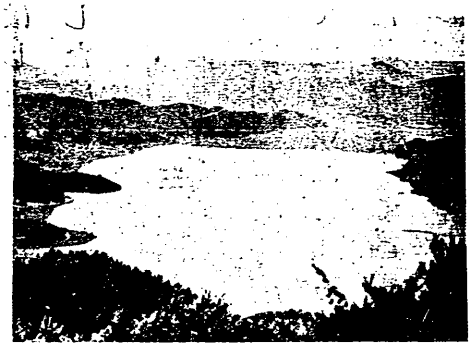
徳川三河守秀康卿、越前に封ぜられ給ひし後、阿閉掃部とて武功のほまれありし者を、厚祿にて召抱へられけり。また狛伊勢とて、これも國にて世祿の歴々なりしが、嫡子に鎧の著初せさせけるに、かの掃部を招待しつゝ、子に鎧著することを賴みけり。

さて饗膳すみ、祝の盃に及びし時、伊勢「今日は愚息が鎧の

著初にて候まゝ、御身の御武功の事御物語り候うて、彼にお聞かせ候へ。」といひしに、掃部「いや、某が身の上に、御話し申すべきほどの武功は覺え申さず候。されど、御望もだし難く候まゝ、某一生のうちに武者ぶりの見事なる士を一人見申して候、その事をお話し申すべし。江州賤が嶽の戰に、暮方に某一騎余吾の湖のわたりを引き候ひしに、敵と覺しくて、後より言葉をかけしゆゑ、馬を引返し候へば、その人申し候は、『今朝よりかせぎ候へども、よき敵に會ひ申さず候。御人體を見受け、幸とこそ存じ候へ。御不承ながら

賤ケ嶽の戰　天正十一年豐臣秀吉と柴田勝家の將佐久間盛政との合戰

余吾の湖　琵琶湖の北端賤が嶽の北麓にある湖



余吾の湖

御相手になり申すべし』とて、進みより候ゆゑ、『それこそ、こちらも望むところにて候へ。』とて、互に馬を乘りはなし、既に槍を合はせんとしけるに、その人、暫し御待ち候へ。今朝より雜兵を多く突崩し候ゆゑ、槍よごれ候まゝ、槍を洗ひ候うて御相手になり候はん。』とて、余吾の湖に槍をうち浸し、二三遍洗ひつゝ、『さらば、』とて突きあひしが、久しく勝負なかりし程に、日も暮れはてて、物のあやめも見えずなりぬ。その時、あなたより言葉をかけ、『もはや槍先も見えず候。御殘り多くは候へども、これまでにて候。御暇申し候べし。御名こそ承りたく候。某は青木新兵衛と申す者にて候。』とて、某が名をも承り候うて、『この後また陣頭にて出で會ひ候はば、互に人手にはかゝり申すまじく候。もしまた味方にて候はば、

わりなき入魂致し候べし。さらば。』とて立ちわかれしが、これほど見事なる武士は遂に見侍らず。いかがなりはて候にや。」と語りけるに、その頃伊勢が許へ心安く出入する青木方齋といふ浪士あり、その日も來りて勝手にゐたりしが、この物語を聞きて、勝手よりにじり出でつゝ、掃部に向かひて、「さてもただ今の御物語承り、今更昔を思ひ、涙を落してこそ候へ。その時の御相手になり候青木新兵衛は、恥づかしながらわれらにて候。かく申すばかりにては、うきたる事に思すべく候。」とて、その時の雙方の鎧の縅、馬の毛色を一々いひけるが、一つも違はざりければ、掃部驚きつゝ、「さて〳〵久しくて逢ひ候うて本望に候。」とて手前にありし盃を方齋にさし、これをしるしにとて、腰の脇差を抜きて引きける。

それより方齋が名、國に高くなりしほどに、秀康卿の耳へも達せしかば、掃部と同じ祿にて召出されけりとぞ。

（駿臺雜話）

四　神社と國民

伊東忠太
工學博士
建築學者
東京帝國大學名譽教授
山形縣の人

日本の各地を旅行したものは、都市の中、田の中、畑の中、さては野の果、丘の上、隨所に欝蒼として茂る大小の森の、自ら別區域を劃して散在してゐる景の印象を得てゐないものはないであらう。

この森の中には、常に特殊な建物が浮世を離れて靜かに塵埃の外に立つてをり、一基の鳥居がその前面に立ち、時には燈籠・玉垣なども見え、更に大規模なものには、幾宇の建物

が並んでゐるのを見るのである。言ふまでもなく、これは神社である。

太古以來の地相の變遷は測り知られぬ。桑田變じて海となるは愚かなこと、田圃は變じて市街となり、河海は埋められて宅地となり、丘陵は崩されて平地となり、樹林は伐り盡くされて赭土となる。この間にあつて、古來依然としてその地點をあらためず、その地相を變ぜず、昔ながらのおもかげを今日に殘してゐる神社こそ、實に床しいかぎりではあるまいか。

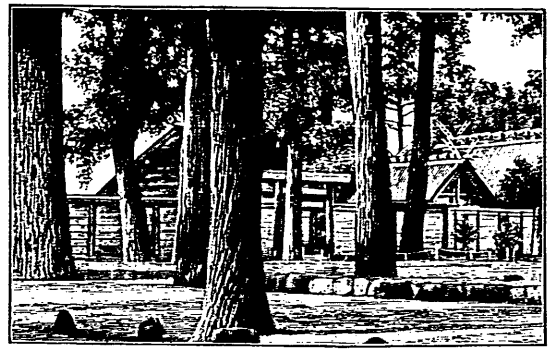
神の森

そも〳〵神社とわが國民との親密なる關係は、邈焉たる太古に始り、連綿として今日に至つて少しも變る所がない。世は幾度か變り、文明は日に月に進歩し、科學は時々刻々に發達し、科學で說明し得ぬものは信ぜられず、直接人間に利益のない事は顧みられない世の中になつたが、神社に對する尊崇の念は、なほ深く腦裡に祕められて、折に觸れ、時に隨つて現れる。

「苦しい時の神頼み」といふ諺がある。平素は神佛の信仰に冷淡なものも、一旦苦境に陷ると、知らず識らず神佛の救を仰ぎ求める。平素は一切を科學の知識で判斷するものも、身に迫つた危難を偶然に脫し得た時、我知らず涙に咽せんで神佑を感謝する。それほどに、神と人との間には深い

因緣が存するのである。されば苦しくない時にも神を賴み、危難の迫らない時にも神佑を祈る心は、誠に美しい人情ではあるまいか。

吾人が吾人の祖先を追慕してその祀を絶たないことは、卽ち忠孝の道である。これが爲に、特殊の儀式を設けて禮拜を行ふことは、誠に美しい人情である。この人情の具體化したものが卽ち神社で、神社の根本義は祖先の靈の實在を認めて、これを禮拜するにある。



伊勢神宮（外宮）

論語に「神を祭る、神在すが如し。」とあるはこれである。卽ち

神を祭る
祭ルニハ如シ在スガ祭ルヲ神ヲ如シ神在スガ
（論語八佾篇）

神社は嚴正なる意味に於ける宗敎とはその趣を異にする。

神前に額づいて、さて祭神の事を默想せよ。わが國本の深遠を思ひ、年の歷史は腦裡に旋回して來る。わが國數千既往に鑑みて將來を思ふ時、心境の豁然たるを覺えるであらう。文明の燈火は吾人を將來に導き、神社の靈光は吾人を過去に誘ふ。文明の事物は吾人に物質的知識を與へ、神社は吾人に精神的敎養を與へる。神社を現代化し、物質化せんとする人の妄は飽くまでもこれを匡さねばならぬ。予はこの見地から日本の神社は永久に古式を傳ふべきものと確信する。伊勢兩宮の千木・勝男木は、永久にかの千年の巨杉の間に聳えねばならぬ。日本帝國の存在する限り、かの太古の俤は變改されてはならぬ。

（末片集）

溝口白羊　名は駒造　文學者　大阪の人

代々木の森　東京市の西郊代々幡町大字代々木にある森

五　明治神宮

溝口白羊

快美なる色彩の反射と和かい感觸とをもつた秋の陽光に包まれてゐる代々木の森。私はそれを仰ぎながら、そして何處からともなく高くにほつて來る新しい檜の香をかぎながら、幾度そこを通つたことであらう。森の中からは、時として、石を切るらしい金屬的の響や、木を削るらしい輕快な音が、快い調子を作つて流れて出た。

或時は、無數の蟻の集團が大きな餌を引くやうに、六七丈もある大きな獻木を牛車に載せて、多數の人夫が汗みどろになりながら曳々聲して森の中へ引入れるのを見たこともあつた。

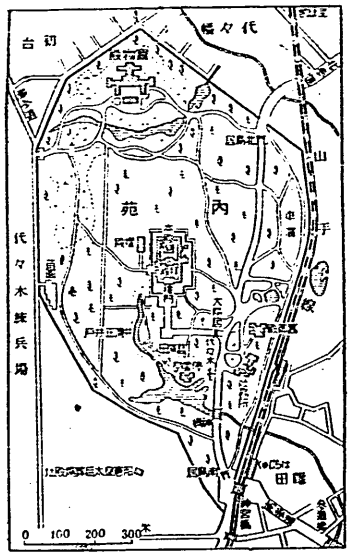
あの中に明治神宮が建つのだと、さう思ふと、私の心は莊嚴な或衝動を感ずると同時に、生みの親の墓に對ずる樣な强い懷かしさが充溢した。そして毎日のやうに其處を通る度に、工程が目に見えて段々捗つて、基礎工事が終り、小屋組が出來て、殿舍の形の次第に整つて行くのが、たまらない程嬉しく思はれた。

其の明治神宮がたうとう竣工を告げた。

かつて赤土の露出してゐる上に、鋭く尖つた切石が幾つもならんで、烈しい日に光つてゐるのを見た處には、今淸々しい色の小砂利を敷きつめた參道の白い線が、常綠の森の中に長く續き、その以前、疎らな松林の中から耕地の廣く展開してゐるのが見渡された御料地はいつの間にやら、すつ

流造　「ながれはふづくり」ともいふ　側面は破風造で棟から前の軒先までを、棟から後の軒先までより長くして、そりをもたせた造りかた

かり見ちがへる程美しい景色になつて、森嚴と幽邃との趣を兼ね備へた鬱蒼たる密林の中から、謂はゆる流造素木の神殿の見えつ隠れつしてゐるのが、何ともいへない神々しい感じを起させる。



明治神宮内苑平面図

神域。眞に神のいましの給ふに適した莊嚴と靜寂と優雅との領土。私ははじめて完成した明治神宮の神苑に立つたとき、其の改つた光景を見て、今更のやうに強烈な感激に打たれた。何者の力が此の新しい建設の事業を完成させたのであらう。造營局の記錄の上には、大正四年四月起工以來、直接造營の事に當つた延人員が百數十萬人であり、用材の總計が尺〆一萬九千本であるといふやうなことが、細密な數字的計算に基づいて書いてあるが、さういふ數字を高く超越して隱れた部面に働いた強い力こそ、實に此の明治神宮の基礎を千載不動の固さに築きあげたものであつて、山よりも高い明治天皇の御聖德と、海よりも深い昭憲皇太后の御仁慈と、此の二柱の大神の御惠に對へ奉る國民の至純なる感謝の心情と、此の三つのものが陰に陽に工程を捗らせて、遂に此の記念すべき大工事を完成するに至らしめた原動力であることは、何人も疑ふことの出來ない明瞭な事實である。

尺〆　切口一尺四方、長さ二間の材木を尺〆一本といふ

嗚呼、純粹な至誠の動機から出た青年團の造營奉仕、百里・

二百里の遠方から眞心をこめて輸送して來た無數の獻木。それらは何事を語つてゐるか。實に此の神宮の御苑を形成する一株の樹木、神殿を組織する一本の柱にも、悉く國民の燃えるやうな熱誠がこもつてゐるのである。かくして、殆ど全く國民の誠意を以て完成したその宮居に、國民崇敬の標的たる明治天皇・昭憲皇太后の神靈が宿らせ給ふのである。何といふ美しい、尊い事實であらう。

明治神宮南鳥居

今までの神社に曾て見たことの無い明治神宮の特色は實にこゝに在るのである。私は表參道を一直線に進んで

神宮橋畔第一鳥居の前に來て、遠く神域の中を望み見た刹那、第一に此の事を直感した。そして一歩々々、美しい小砂利の上を、神殿に近く踏入るに隨つて、愈、肅然たる心持になつて、深く襟を搔合はせた。

參道の兩側には盡きることを知らない密林がどこまでも長く續いて、行くに隨つて段々濃くなつてゐる。

鳥居から約一町ばかり奥へ入つて神橋の處へ來ると、何處からともなく清冽な水の落ちる音が聞えて來る。岡山市萬成（まんなり）產の石で出來てゐるといふ勾欄に凭つて下を見ると、溪流の趣を摸

萬成　花崗石の名產地

神橋

紅於霜葉紅ニ於ナリ二月花ヨリ（唐の杜牧）

明神鳥居　柱は圓く笠木・島木はそりを持ち、額束・くさびがある

原宿　東京府豐多摩郡千駄ヶ谷町大字原宿

した風致の好い細流の兩岸、筑波山の國有林から移した自然石の配置された處に、數十株の楓が、今しも紅於の影を水面に落して、美しい秋の錦を織つてゐる。　此處は神苑の中で唯一の人工を加へた處で、神苑の殆ど總べてが纖細な技巧を排した自然的の大觀を呈してゐる中に、特殊の庭園趣味を發揮してゐる。

神橋を渡ると兩側は一帶の杉並木になつてゐて、その左側の並木が斷えた處に、千七百四十年の樹齡を重ねたといはれる直立六丈餘の臺灣產檜の古木で造られた大鳥居がある。　明神鳥居としては實に日本第一のもので、高さは三丈九尺に達するとの事だ。

此の鳥居の在る處に南方原宿方面からする幅員八間の

千駄ヶ谷　東京府豐多摩郡千駄ヶ谷町大字千駄ヶ谷

土佐繪　平安朝の末に起つた風俗畫　藤原基光・隆能などを祖とする

木曾　長野縣西筑摩郡木曾川の上流地方

南參道と、北方千駄ヶ谷から來てゐる幅員六間の北參道との接合點で、此處から左折すれば、道は更に十間の幅員に擴大されて西を指すこと百五十間、その道の盡きた處で右を見ると、ぱつと眼界は廣く且明るくなつて、約一町の北方に亭々として高く聳えた松の疎林を背景にした土佐繪のやうな神殿の檜皮葺を拜することが出來る。

御社殿は樓門・拜殿・本殿等の建造物を合はせて、其の總坪數六百五十坪。　本殿は全部木曾御料林產の檜材を以て造られてある。　近く拜殿にのぼつて拜すると、芳しい檜の香氣が強く鼻を撲つて、如何にも神の新しい宮居らしい一種の崇高な感じに打たれる。　拜殿から中門を通して奥は、即ち神靈のおはします內々院で、衆庶の漫りに窺ふことを許

何事の
西行法師の歌

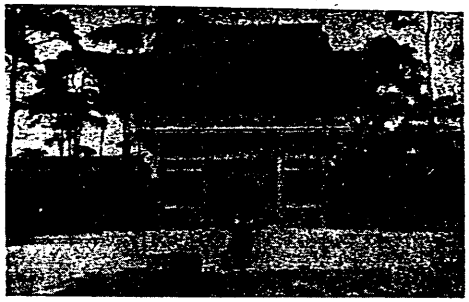
されない神聖の場所である。

何事のおはしますかは知らねども
かたじけなさに涙こぼるゝ

私は默禱を終へて、始めて向ふを見上げた。

まあ、何といふ明るい、快い感じを持つた社殿だらう。今まで見た大抵の社殿が皆暗い周圍から來る鈍い光波の中に、靜寂な併し陰欝な感じを漂はせて居る中に、此の神宮ばかりは隱す所の無い心持で、十分な光線に總べてを解放し、總べてを露出して見せてゐる。而も、それでゐて決して淺膚な心持はせずに、却て一層深く大きくされた靜寂の中から、響へやうのない莊嚴な感じが滲透して來て、自然と頭のさがるやうな強い威力が迫り來るのを覺えるのだ。

いかにも明治天皇の神靈を奉祀するにふさはしい神宮である。



南神門（楼門）

久しく宮廷に蟠つてゐた一切の舊弊を排除して國民と近く觸接し、國民と親しく協力して新文明を吸收しようと御勉め遊ばされた明治天皇の活動的進取的の濶達な御氣象に對して、如何にもその明るいお宮の感じが、ぴつたりと呼吸を合はせてゐるやうに思はれる。

拜殿を中心にして左右に均齊を保ちながら、長く兩翼を張つた廻廊に見える幾多の列柱、そして其の奥につづいて

便殿の遠く望まれる心持、それら總べてが、又たとしへもない莊嚴美を語つてゐる。

拜殿を下りて、西神門から出ていくと、約一町に亙る森林帶があつて、その向ふ、廣く開けた明るい視野の中に、目の覺めるやうな芝生地が一面に綠の色を展べてゐる。

嚴肅から快活へ、莊嚴から優雅への急轉が其處に見える。

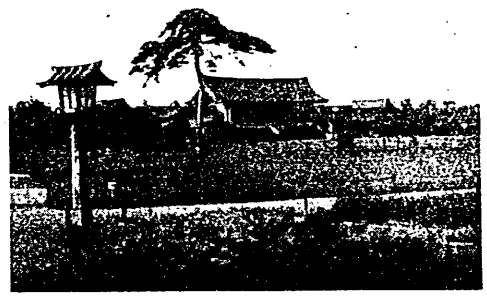
こゝらへ來ると、周圍の林苑は著しく庭園風を帶びて來て、樹林を組成する色々の樹種の中に、落葉樹の交つてゐるのが少からず目につく。寶物殿へ行くまでの道には、ずつと長い間、さうした色彩が續いてゐる。寶物殿は形式を中古時代に取つて、其の材料と建築の方法とを現代に取つた鐵筋コンクリート石張の建築で、建坪數實に五百十五坪、これに使用した八幡製鐵所製の鐵材は約十二萬貫に及んだといはれてゐる。

八幡製鐵所
福岡縣八幡市にある國立の製鐵所

後ろは一帶の密林で、前には優雅な橋梁を架けた池水を控へ、その池塘をめぐつてわか〳〵しい楓の樹が美しく植ゑつらねてある。

私は此の寶物殿まで來ると、再びもと來た道を表參道の桝形に近い社務所の邊まで引返した。このあたり左右兩側にある古雅な木柵を廻らした一構は、即ち明治天皇、昭憲皇太后の深い御由緒を留めてゐる舊御苑で、御苑內の建物は、舊御殿といひ、舊御茶屋といひ、

舊御茶屋
隔雲亭と申す



寶物殿

何れも極めて御質素のものばかりであるが、御庭は實に田園の自然の景色そのまゝのもので、殊更技巧を弄しない處に何ともいへぬ優雅な趣を帶びてゐる。此の御苑は祭神二柱の御在世中殊に御愛賞遊ばされた處で、大空高く聳えてゐる松を背景にした芝生のあちこちに、しをらしく咲いてゐる萩の花の幾株にも、熊笹の一面に生茂つた小丘の上に連なり續いてゐる櫟や楢の雜木林にも、東京近郊では到底見る事の出來ない野趣がある。

私はこれらを一わたり拜見して廻つて、涙ぐましい程の強い感激に打たれながら、夕暮近くなつたので御門を出た。

振返つて見ると、神殿のあたりはすつかりもう深い靄につゝまれて、晝でも暗いほど黑々と生茂つてゐる樹林の中を、かつきりと切開いたやうに、路線の白い色の暮殘つて續いて見えるのが、何となく嚴肅な氣分を起させた。

私の胸には、其の神祕な境の中に、ほんのりと浮かんで見える素木造の神殿と、檜皮葺の屋根を美しく流れてゐる優雅な曲線とが、神域を出てからも、いつまでも長く鑄附けられたやうに殘つてゐた。

一草一木の末にも祭神二柱の御威靈の宿つてゐる森嚴な、幽邃な、優雅な神苑よ。長い私の一生を通じて、果して此の深い印象を忘れる日があるだらうか。

（「明治神宮紀」に據る）

六　月よみの光

釋良寛
越後の歌僧
天保二年歿
年七十五

月よみの光を待ちて歸りませ山路は栗のいがの多きに

里べには笛や太鼓の音すなりみ山はさはに松の音しつ

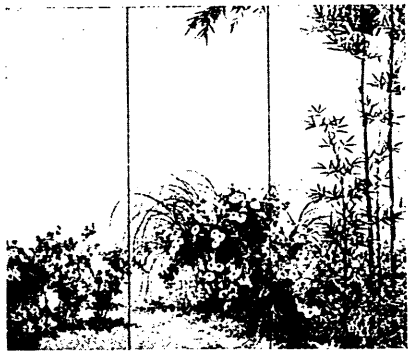
釋　良　寛

橘曙覽
福井の歌人
明治元年歿
年五十七

聞く夜あり聞かざる夜あり秋の蟲鳴きやむ頃になりやしぬらん

蟻と蟻うなづきあひて何か事ありげにはしる西へひがしへ

橘　曙　覽



秋の野

大隅言道
福岡の歌人
明治元年歿
年七十一

さきだちて山路過ぎ行く牛の親に子牛より來る村時雨かな

妹が背にねぶる童のうつゝなき手にさへめぐる風車かな

大　隅　言　道

落合直文
號は萩廼舍
仙臺の人
國文學者
明治三十六年歿
年四十三

霜やけの小さき手して蜜柑むくわが子しのばゆ風の寒きに

緋緘のよろひをつけて太刀はきて見ばやとぞおもふ山ざくら花

落　合　直　文

正岡子規
名は常規
竹の里人とも號す
俳人　歌人
伊豫松山の人
明治三十五年歿
年三十六

寢しづまる里のともしび皆消えて天の川白し

正　岡　子　規

伊藤左千夫
名は幸次郎
歌人
千葉縣の人
大正二年歿
年五十

竹藪のうへに
新室に歌詠みをれば棟ちかくかりがね鳴きて
茶は冷えにけり

伊藤左千夫

おりたちて今朝の寒さを驚きぬ露しと〳〵と
柿の落葉深く

鷄頭のやゝたち亂れ今朝や
露のつめたきまでに園さび
にけり

鷄頭

吉田絃二郎
本名は源次郎
文學者
佐賀縣の人
上野町
三重縣伊賀國

七　伊賀の旅

吉田絃二郎

吉田絃二郎

山沿ひの上野町の停車場からさらに町までは、小さな輕便鐵道の聯絡があつたのだが、それを知らなかつた私は停車場からをやとふことにした。停車場から十二三町離れて、桑畑や稻田をへだてたところに一連の丘がある。丘の北方は美しい杉の山になつてゐる。白鳳城といふ昔の城の址だといふことである。その杉の山を北に負うて丘の上に擴つてゐるのが上野の町である。停は稻と桑との間を一直線に白鳳城の丘に走る。城址に近づくにつれて

荒木又右衛門　伊賀の人　義弟渡邊數馬と共に義父の仇河合又五郎を伊賀の上野に討つた

芭蕉　姓は松尾　俳人　伊賀國上野の人　元祿七年歿　年五十一

道はまた上りになる。

上野町の西はづれ、丘を下りたあたりに木立が見える。

「あすこが伊賀越の道になつてゐます。荒木又右衛門の仇討はあの邊です」。車夫は得意になつて、荒木又右衛門の仇討の話をして聽かせる。吉野山の武藏坊辨慶の話、笠置山の後醍醐帝の話と車夫は白鳳城に着くまで少しも話を休ませない。

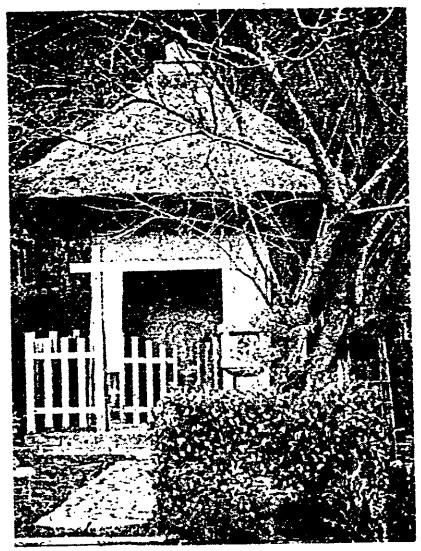
白鳳城跡の杉林を通り過ぎると上野の町が見える。蠶の薗を小山のやうに積んだ家がある。くづれかゝつた土塀にかこまれた家がつづく。修竹の藪が多い。

「こゝは丸の内です」と車夫はいふ。芭蕉の兄松尾半左衛門の邸もこの近くにあつたのであらう。

義仲寺　琵琶湖岸膳所「ゼゼ」から十數町の所にある寺　義仲の墓、松尾芭蕉の墓がある

松尾家の菩提寺愛染院に俥を走らせる。

寺の前に俥を止める。塀を越して芭蕉の葉が眼につく。



故郷塚

本堂からは讀經の聲が聞えて來た。

堂の前を左に、さらに右して竹にかこまれたさゝやかな草堂がある。堂の中に丈二尺ばかりの自然石がある。芭蕉の故郷塚である。浪花から淀川を溯つて伏見に出で、狼谷を越えて近江義仲寺に芭蕉の亡骸を運んだ時、伊賀上野から駈けつけた土芳・卓袋が芭蕉のかたみを抱へて來てこゝ

に葬つたのである。

讀經を終つた住持に案内せられて庫裡と本堂との間の廊下の薄暗いところに芭蕉の位牌を拜し、芭蕉の像を觀る。芭蕉が死ぬる一年前に弟子と二人して作り上げたといふ塑像である。朴々たる老人である。好々爺である。

竹叢を背景とした芭蕉の故郷塚を辭して門を出づ。門前では車夫がビスケット（Biscuit）を俥を曳く犬にやつてゐた。雁來紅が秋風になぶられつゝあるのが忘れられたやうな古町の寂しさを一層深くしてゐた。

壞れかゝつた土の塀、低い武家風の門の奥には、柔かな修竹がつゝましやかに邸々をつゝんでゐる。或は大和へ、或は近江へ、山を越えて走る初時雨が、この山につゝまれた伊賀の町を一薙ぎに横切る時、修竹を打つ時雨の音はどんなにか寂寞の詩人の心を打つたであらう。

俥を南へ走らせる。たいていは軒の低い平家である。京都の横町を聯想させる感じのいゝ落ちつきのある町である。さゝやかな冠木門の奥に修竹の林があり、中に草庵めいた家を見出すこともある。

冬籠またよりそはん此のはしら

故郷に歸つて冬を送つた芭蕉は、恐らく竹林の中に、自然木の床柱に凭りかゝつて旅の疲を憩うたであらう。旅に聽いた時雨の音を思ひ出したであらう。凩の聲に耳を傾けたであらう。

秋の日を浴びた修竹の中に芭蕉にゆかり深い幾多の枯

枝廢壁が遺つてゐるらしい。

長閑さや櫻の上にちる櫻

さま〴〵のことと思ひ出す櫻かな

風いろやしどろに植ゑし庭の萩

まづたのむ椎の木も有夏こ立ぼせを

芭蕉筆跡

枯芝やまだ陽炎の一二寸

故郷や臍の緒に泣く年のくれ

これらの句が作られたのはこの丘の上の靜かな町であつた。そこにもこゝにもこんもりとした竹の林があり、傾きかゝつた門がある。鷄頭の花の眞つ紅な門にレグホンが餌をあさつてゐる家もある。

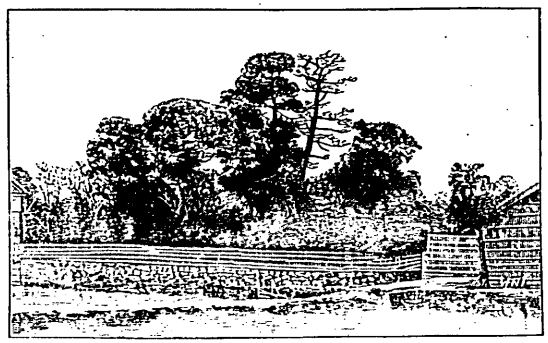
愛染院から商賈の軒に沿ひ、幾曲り俥を走らせて、上野町の南にある蓑蟲庵に著く。雨催ひの雲が時々上野町の空を低くかすめて飛ぶ。

蓑蟲庵の南にも今は幾軒かの家が立並んでゐるが、昔は庵は丘の端になつてゐて、そこからは遠い山が伊賀の平原をへだてて眞正面に見えたらしい。今でも緣に凭れば木立を通して南の山が見える。

いつ誰住むともなく古びた籬、いつ開かるゝともなく鎖された門の前に俥をとどめて、左手に片寄つた小門から案内を乞ふ。五十ばかりの女があわただしげに走り出て來て、庭に案内してくれた。外庭には秋草の中に秋茄子が赤

くしやがれてゐた。

柴折戸をくぐつて中に入る。落葉朽葉二三寸が程に積り、やゝもすれば飛石を埋める。梅があり、櫻があり、百日紅がある。芭蕉手植の松がある。朽葉につゝまれた池があり、池には水草の花が暗い底にまどろんでゐる。一抱へほどの松である。小さな橋がある。庭の東南隅のやゝ小高い所に亭があり、亭の前に芭蕉遺愛の燈籠がある。細長く痩せて苔むしてゐる。



蓑蟲庵

芭蕉が夜もすがら月を眺めて土芳と語つたであらう濡

縁も沓脱もそのまゝになつてゐる。濡縁に腰をおろして空を見れば、小暗きまでに繁つた木立を通して、靜かに秋の雲が動き、秋の聲が流れる。

水を含んだ老木の枝には蝸牛が眠り、蓑蟲が夢みてゐる。蝸牛も蓑蟲も芭蕉がこの庭を歩いた日以來眠りつづけてゐるのであらう。それほど庭は暗く、濕り、靜かである。一葉の地を打つ音すらも秋を深めるほどに。

今宵たれ吉野の月も十六里

蓑蟲庵の疊に流れこんで來る月の光を浴びながら、この句を讀んだ芭蕉の心も、こゝに來て、この濡縁に腰を卸して、蝸牛と蓑蟲の眠を見る時、想像することが出來る。全くこの一句の味、伊賀の蓑蟲庵を訪れてはじめて味はふことが

出來たやうな氣がする。

みの蟲の音をきゝにこよ草の庵

蓑蟲庵は蓑蟲の音を聽いて芭蕉を懷ふにふさはしい庵である。しかし、あわただしい旅には蓑蟲の音を聽く餘裕もない。

再び俥を走らせて上野町を一直線に北に横切る。俥は稻田を隔てた向ふの山の麓の停車場へと走る。七八軒の家が小さな停車場を圍んで、山の裾の小高い丘に並んでゐるのがさびしく見える。

鈴鹿はまだ雨雲に隱れてゐる。

私は伊賀の山を越えて、再び大和へ歸らなければならぬ。日は大和境の山に暮れかゝつた。

（木に凭りて）

鈴鹿「スズカ」伊勢國鈴鹿山脈

國木田獨步
名は哲夫
文學者
兵庫縣の人
明治四十一年歿
年三十八

武藏野
東京の西北部に展開する武藏國の大平野で、南は相模野に、北東は利根川・江戸川に、西は秩父連山に連る

八　武藏野

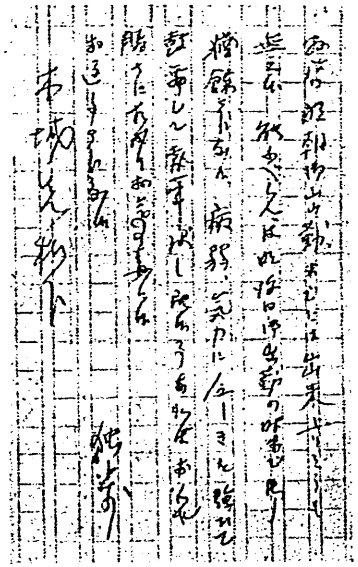
國木田獨步

國木田獨步

武藏野に散步する人は、路に迷ふことを苦にしてはならない。どの路でも、足の向く方へ行けば、必ずそこに見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。

武藏野の美は、ただ縱橫に通ずる數千條の路を、あてもなく步くことによつて始めて獲られる。春・夏・秋・冬・朝・晝・夕・夜、月にも、風にも、霧にも、霜にも、雨にも、時雨にも、ただこの路をぶら〳〵步いて、思ひつき次第に右し左すれば、隨所に我等を滿足させるものがある。これが實に武藏野第一の特色だらうと、自分は

しみ〳〵感じてゐる。武藏野を除いて、日本にこんな所がどこにあるか。北海道の原野には無論のこと、那須野にもない。その外どこにあるか。林と野とがかくもよく入亂れて、生活と自然とがこのやうに密接してゐる所がどこにあるか。實に武藏野に斯る特殊の路のあるのは此の故である。



獨歩の筆蹟

那須野
栃木縣那須嶽の東南麓一帶の平原

拜啓明朝御出勤まではは出來上りそうも無之候能ふべくんば明後日御出勤の時まで御猶餘枝下度候病弱、氣分に乏しきを强ひて鼓舞して執筆致し居候事なればおくれ勝ちに相成りお氣の毒に候　獨歩
お返事枝下度候
木城兄机下

されば、君もし一の小徑を行き、忽ち三條に分れる所に出たなら、困るには及ばない。君の杖を立てて倒れた方へ行き給へ。或はその路が、君を小さな林に導くかも知れない。林の中ほどに到つて、また二つに分れたなら、その小さな路を選んでみ給へ。或はその路が君を妙な所へ導くかも知れない。それは林の奥の古い墓地で、苔むした墓石が四つ五つ並んで、その前に少しばかりの空地があつて、その横の方にをみなへしなどの咲いてゐるといふやうな所だ。頭の上の梢で小鳥が鳴いてゐたらば、君の幸福である。すぐ引返して左の路を進んでみ給へ。忽ち林が盡きて、君の前に、見渡しの廣い野が展

武藏野の道

ける。足下から少しだら〳〵下りになり、萱が一面に生え、尾花の末が日に光つてゐる。萱原のさきが畑で、畑のさきに背の低い林が一叢繁り、その林の上に遠い杉の小森が見え、地平線の上に淡々しい雲が集つてゐて、雲の色に紛ひさうな連山が、その間に少しづつ見える。十月、小春の日の光が長閑に照り、小氣味よい風がそよ〳〵と吹く。もし萱原の方へ下りて行くと、今まで見えた廣い景色が悉く隠れてしまつて、小さな谷の底に出るだらう。思ひがけなく、細長い池が萱原と林との間に隠れてゐたのを發見する。水は清く澄んで、大空を横ぎる白雲の斷片を鮮やかに映してゐる。水のほとりには枯蘆が少しばかり生えてゐる。この池のほとりの小徑を暫く行くと、また二つに分れる。右に行けば林、左に行けば坂。君は必ず坂を上るだらう。とかく武藏野を散歩するのに、高い所、高い所と選びたくなるのは、何とかして廣い眺望をた得いと求めるからで、しかもその望は容易に達せられない。見おろすやうな眺望は決して出來ない。それは初からあきらめたがいゝ。

もし君が、何かの必要で路を尋ねたく思ふなら、畑の眞中にゐる農夫に聞き給へ。農夫が四十歳以上の人であつたら、大聲をあげて尋ねてみ給へ。驚いてこちらを向き、大聲で教へてくれるだらう。もし少女であつたら、近づいて小聲で聞き給へ。もし若者であつたら、帽子をとつて慇懃に問ひ給へ。大樣に教へてくれるだらう。怒つてはならない。これが東京近在の若者の癖だから。

教へられた路を行くと、路がまた二つに分れる。教へてくれた方の路はあまりに小さくて、少し變だと思つても、そのまゝかまはずに行き給へ。さうすると、突然農家の庭先に出るだらう。なほ變だと驚いてはいけぬ。その時、農家でまた尋ねてみ給へ。「門を出ると、すぐ往來ですよ。」とすげなく答へるだらう。農家の門を外に出てみると、果して見覺えのある往來だ。なるほど、これが近路だなと、君はすぐ微笑を洩らすに相違ない。その時、始めて教へてくれた路の有り難さがわかるだらう。

まつすぐな路で、兩側とも十分に黄葉した林の四五町も續く所に出ることがある。この路を獨り靜かに歩むのは、どんなに樂しいことだらう。右側の林の頂には、夕陽が鮮やかに輝いてゐる。折々落葉の音が聞えるばかり、あたりはしんとして、いかにも淋しい。前にも後にも人影が見えず、誰にも遇はない。もしそれが木の葉の落盡くした頃ならば、路は落葉に埋れて、一足ごとにがさ〳〵と音がする。林は奥まで見透かされ、梢の先は針のやうに細く蒼空を指してゐる。なほ更人に遇はない。いよ〳〵淋しい。落葉を踏む自分の足音ばかり高く、時に一羽の山鳩のあわただしく飛去る羽音に驚かされる。

同じ路を引返して歸るのは愚である。迷つたところが、今の武藏野に過ぎない。まさかに行暮れて困ることもあるまい。歸りもやはり凡その方角を定めて、別の路をあてもなく歩くが妙。さうすると、思はず落日の美觀を獲るこ

とがある。

日は富士の背に落ちようとして、まだ全く落ちず、富士の中腹に群る雲は黄金色に染まつて、見るがうちにさま〳〵の形に變ずる。連山の頂には白銀の鎖のやうな雪が次第に遠く北に走つて、終は黯澹たる雲の中に沒してしまふ。

日が落ちる。野は風が強く吹く。林は鳴る。武藏野は暮れようとして、寒さが身にしむ。その時は路を急ぎ給へ。顧みて思はず新月が枯林の梢に寒い光を放つてゐるのを見るだらう。烈しい風が今にもその梢から月を吹落しさうである。突然また野に出る。

君はその時、

山は暮れて野はたそがれの薄かな

山は暮れて　與謝蕪村の句

の名句を思ひ出すだらう。

相馬御風　名は昌治　文學者　新潟縣の人

九　落葉する頃

相馬御風

（武藏野）

一時雨來る毎に庭の木の葉が散つて行く。私はけふ此の頃、この庭の木の葉の散つて行く風情を心ゆくばかり眺め樂しんでゐる。春の芽吹き、初夏の若葉、眞夏の綠、秋のもみぢ、いづれにもそれ〳〵の風情はあるが、晩秋初冬の落葉の風情もまた格別である。常磐樹にもそれとしての獨特の風情はあるが、私はそれよりも落葉樹の風情の方に一層複雜な味ひがあるやうに思ふ。

木の葉が散る。しきりに散る。

同じく皆散つて行くのであるが、風にあふられてあわた

だしく散つて行く葉もある。風もないのに靜かに散り落ちる葉もある。ひどい風が何度吹いて來ても强情にしがみついてなか〳〵散らうとしない葉もある。

裏を見せ表を見せて散る紅葉

これは良寛和尚が最期の病床に横たはりながら幾度となく口ずさんだ句であるといふ。誰の作であるか、そのことは良寛みづから語らなかつたといふが、いかにもその句が自分の辭世の言葉でもあるかのやうに、幾度

良寛　越後の歌僧　天保二年寂　年七十四

落葉

も幾度も微かに口ずさんだらしい。その事は良寛和尚の最愛の弟子であつた貞心尼の記錄に書かれてゐる。

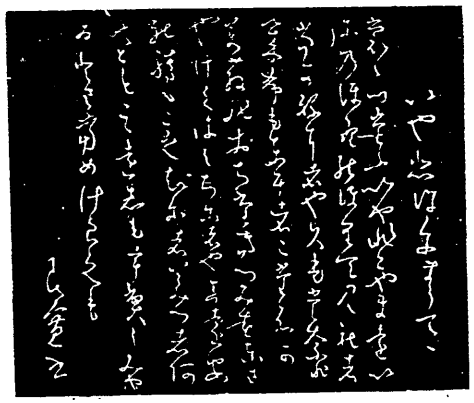
木の葉は散る。裏をも表をも安らかに見せながら木の葉は散る。冷たい大地の上へ……。

良寛筆蹟

一荒れごとに雪が里に近づいて來る。

二三日前までは中腹あたりまでしか白くなつてゐなかつた山々が、今日見るともう麓近くまで白くなつてゐる。

里に雪の來るのも遠くないであらう。此の二三日の雨



いやひこにまうでて
もゝつたふいやひこやまをいやのぼりのぼりて見れはたかれにはやくもたなひきふもとにはこたちかみさひおちたきつみをとさやけしこしちにはやまをあれともこしちにはみつはあれともこゝをしもうへしみやゐとさためけらしも　良寛書

の音を聞いただけでもそれが感じられる。まだ霙といふほどでもなく霰まじりといふほどでもないが、何となく雨の音が堅くなつた。

窓に吹きつける嵐の音のもの凄さ！

毎年いよ〳〵冬が來たと感じさせる寺々の報恩講の鐘の音を聞くのも、あともう三日だ。どの家でも眞劍に冬籠の支度を急いでゐる。

北國の冬は永い。殆ど四ケ月の間雪に埋れて暮さなくてはならぬ。

またその永い冬がやつて來つゝある。

あらしの前の靜けさ。天も地も、草も木も、あらゆるものが息をひそめて、不安のどん底に呆心してゐるやうなその

靜けさ。さうした自然の靜けさに度々接するのも此の頃であるが、それと共にあらしの後の靜けさ、その何ともいへない快い天地の靜けさを時々味はふことの出來るのも此の頃である。

北國の冬の荒れは物凄い。しかし、その物凄い暴風雪があればこそ、そのあとの快い靜けさを味はふことも出來るのだ。

凍風

庭の山茶花がまだ咲いてゐる。霙の感じに近い冷い雨に濡れながら、いゝ色の花を咲かせてゐる。

島村抱月
名は瀧太郎
早稲田大學教授
島根縣の人
大正七年歿
年四十八

この山茶花の咲いてゐるのを見ると、私はよく東京に住んでゐた頃の雜司ヶ谷あたりの初冬をおもひ出す。あのあたりには垣根に山茶花の咲いてゐる家が多かつた。よく晴れた初冬の朝、薄紅色の山茶花の散敷いた垣根沿ひの通りを歩いて勤めに出たことがふと思ひ出される。

しかし、こちらでは山茶花の咲く頃が最も雨が多い。ここでは此の花は冷い雨に濡れながら咲き、且散る運命を負はされてゐる。

だが、何れにしても山茶花はさびしい花だ。葉の色も、花の色も、かなり鮮やかでありながら、何となくさびしい花だ。

恩師島村抱月先生は此の花が最も好きであつた。私達は先生のお墓に此の木を澤山植ゑた。此の花は私に亡き先生をおもひ出させる。

シルウェット
Silhouette
黑影

木の葉がしきりに散る。

しかし、葉の散つた後を見ると、いづれの木も來年の春になつて芽吹くべき其の芽が、堅い皮の下に用意されてゐる。

葉の落ちた後の木々の枝に、點々として小さな疣のやうに見えてゐる翌年の芽の用意を見ると、私は妙になつかしさを覺える。

夕燒空に描き出された冬枯の木のシルウェットを見上

林　間

げる感じも私は好きだ。

一〇　蘆庵と君平

（郷土に語る）　瀧澤馬琴

蒲生修靜、山陵訪求の爲に京に赴きし時、彼の地に絶えて知る人なし。當時、小澤蘆庵は古學を好みて、萬葉風の詠歌に名高く、世をすねたる隱逸なりと、かねて傳へ聞きしかば、彼が助を借らばやとて、其の京に入りし日に、やがて蘆庵が宿所を尋ねたり。小澤が老僕出迎へて、「いづこより」と問ふ。言寄る由もなきまゝに、修靜まづ佯りて、「某は下野なる宇都宮のほとりにて、蒲生伊三郎と呼ばるゝものなり。琴を好み候へども、田舍には良き師なし。主人の翁は琴の妙手にておはするよし、東野のはてまでもかくれなし。これにより、御弟子にならまくほりして、はる〳〵と來つるにて候」といふ。

瀧澤馬琴

瀧澤馬琴
名は解
小說家
江戸の人
嘉永元年歿
年八十二

蒲生修靜
名は秀實
字は君平
通稱は伊三郎
勤王家
宇都宮の人
文化十年歿
年四十六

小澤蘆庵
名は立中
歌人
尾張の人
享和元年歿
年七十九

東野
東國なる下野の國

其の僕心を得て奥に赴き、云々と告げにけん、蘆庵の聲と覺しくて、いと高く、「あな無益にも訪はるるものかな。汝出でてしか答へよ。『主人は久しう客を辭して交を絶ちたれば、都の中にだに親しうものせるは稀なり。琴は若かりし時かき鳴したりけれど、あちこちの人に知られて、彼に聞かせよ、此に教へよといはるゝがうるさければ、近頃打摧きて薪に代へたり。

蒲生君平

かゝれば、所望に從ふべくもあらず。他に行きて求めたまへ。」と言へ。といふ聲の、襖一重を隔ててぞ聞えける。

修靜、僕が云々といふをも待たず、更におし返して言ふ、「翁の御答はこゝにてつばらに漏れ聞きたり。某なほ一言あり。願はくは、枉げて聞き給へ。吾は下野なる儒者なり。しか〳〵の志願あれば、しば〳〵江戸に遊學し、こたみ都に上りしかど、相識れる者絶えてなし。翁の古學を好み給ふと其の氣質の俗ならぬとは、かねて傳へ聞くものから、言寄るよしのなきまゝに、琴を學ばんために來たりつ。」とは言ひしなり。こは長者を欺くに似たれども、其の虛言は已むことを得ざりし實情より出でたれば、許されて對面せられなば、肝膽を吐き志願を告げて、翁の助を借らんと欲す。かくても意にかなはずば、退けられんこと勿論たるべし。今一たびわどのを勞せん。この由取次ぎたまへ。といふ。蘆庵これを漏れ聞きて、「さりとは思ひがけざりき。そは奇しき客人なり。對面せずばくやしきことあらん。此方へと申せ。」とて、やがて面をあはせけり。

修靜深く歡びて、夙くより思ひ起せる志願の由を說き示し、山陵志著述のために古き御陵を尋ねんとて旅寢をしつる事の趣云々と語り出でつるに、蘆庵も只管感歎して、「足下は得難き學士なり。さる志ならんには、吾が庵に杖を留めて、こゝらわたりの御陵を徐かに訪求したまへ。」とて、又他事もなくもてなしけり。

これによりて、修靜は日毎に古陵を尋ね巡るに、ともすれ

ば日暮れて歸るに、主人は自ら風爐を焚きて湯あみせさせければ、修靜、老人の心づかひ心苦しとて辭めども、從はず。「これらの事は只管に客を愛する故のみにあらず。吾も亦かゝる奇人に宿する事の歡ばしく、且は足下の疲勞を慰めて、國のために力を竭す人の助にならんとてなり。必ずいなみ給ふな。」とて、後々までもしかしてけり。

小澤蘆庵

かゝりしほどに、修靜、ある夜更闌けて、子二つの頃歸りしかども、蘆庵は寢ねず待ちて居り。例の如く湯あみせさせ、飯をすゝめて、さていふやう、「吾足下に宿せし日より、蔬菜の外に物もなく、させるもてなしはせざれども、夜は老僕をやすらはせんとて、手づから風爐さへ焚くを思ひ汲み給はずや。古陵を尋ね巡ればとて、今までは要なからんに、道草くうてか。老人に物を思はせ給ふこと心得難し。」とつぶやきけり。修靜聞きて容を改め、「翁の恨理なり。吾が非を飾るにあらねども、更闌けたるは聊か故あり。慨悔の爲に笑に供へん。けふはそれの天皇の御陵を尋ねたりしに、日の暮るゝまで尋ねもあはで、思はずも等持院なる尊氏の墓を見たり。こゝに至りて、年來の恨心頭に起りて堪へられず、墓に向かひて罵るやう、「梟臣尊氏、なほ靈あらば、今言ふことを確かに聞け。汝が一旦治りたる建武中興の世を亂して、逆に取り逆に守りて毒を後世に流ししより五百十數年、干戈をさまらず、國の舊典もこれが爲に燒け亡び、王室も亦これに因りて卑し

等持院　京都市衣笠町にある臨濟宗の寺。足利氏の菩提寺。足利義詮の創立する所

く、古帝世々の山陵すら迹なくなりて、吾らにさへあくまで物を思はするは、皆悉く汝が罪なり。天罰當に知るべし。」とて杖もてあたりの石を思の儘に打毆き、かくて寺門を出づる程に、物ほしうなりしかば、道のほとりの酒屋に立ちより、怒にまかせて飲むほどに、六七合盡くしたり。さて、酒屋を出でしかど、醉うて足も定まらず。このまゝにて歸り行かば、必ず翁に叱られん。なかば醒して行かんと思ひて、株に尻をかけしより、熟睡やしけん、時移りて驚き覺むれば更闌けたり。」と語る。

蘆庵ふきいだして、からく、とうち笑ひ、「さても〳〵、世の中には似たる馬鹿者もあるものかな。われら亦往ぬる年、ある日、靈山の邊に逍遙して長嘯子の墓をよぎりし時、流石に宿恨なきにあらねば、行きもえやらずにらまへて、『長嘯子、不滅の罪あり。わぬしみづからこれを知るや。わぬしは豐太閤の外族とて、位高く、且采地も廣かるに、心ざま武士に似ず、伏見の籠城に敵の旗色を見て鬼胎を抱き、鳥居元忠を捨殺にせしは不義なり。事平ぎて罪を蒙り、わづかに命を助けられしを幸にして恥を知らず、心にもあらぬ世捨人がほしてえせ歌多く詠じたる、一盲衆盲を引きしより、歌の調わろくなりて今に至るまでなほらぬは、これ不滅の罪にあらずや。冥罰かくの如くならん。』と罵りながら、杖をあげてあたりの石を毆きたる事ありけり。こは能く似たるにあらずや。」と、語りもあへず、聞きも終へず、齊しく腹をかゝへたりとぞ。

（兎園小說）

靈山　京都の東山の一峯、四條の末に當る

長嘯子　木下勝俊　豐臣秀吉の夫人北政所の兄なる木下家定の長子　慶安三年歿年八十一

鳥居元忠　德川家康の臣　慶長五年伏見城で戰死す　年六十二

加藤武雄
小說家
神奈川縣の人
家の庭
作者の生家は神奈川縣津久井郡川尻村、相模國であるが山梨縣の方へ入込んでゐる桂川の峽谷地方である

一一　村の思ひ出

加藤武雄

神嘗祭の頃になると、山茶花の花が咲く。山茶花の花が咲く頃になると、家の庭から眺めやられる國境の連山の頂が斑らに雪を置きはじめる。

「おゝ、寒い！　寒い筈だ。今朝は山に雪が來たぞ。」

さういつて遠山の雪に瞳をあげる心持、あのきつと心がひきしまるやうな新鮮な心持は、山國に育つた人ならば、何人でも經驗するところであらう。

その山の雪が朝毎に白い部分を增していつて、やがて眞白になる頃には、「富士隱し」と私たちが呼びならはしてゐた一際高い峯の肩のところにある富士山が、ひよつこりと額をのぞかせる。多分光線の工合なのだらうと思ふが、其の頃私たちは、富士山に雪がつもつて、それだけ富士山の脊丈が高くなつたのだとばかり思つてゐた。梯形になつてゐる頂部の一角だけがほんのちらりと見えるだけなので、勿論八朶の花に譬へられるあの全容を髣髴すべくは無かつたが、それにしろ、「おれがの村からは富士山が見えるぞ。」と、隣村から來る學校友だちには、それを自分のもののやうに自慢したものだつた。

が、その富士も、寒い盛の三十日か四十日の間、ちらりと額を見せただけで引込んで了ふ。せいのびして、ちらと覗いて見た――まあ、さういつた感じなのだ。富士山が見えなくなる頃には、山々の雪も消え初めて、匂やかな紫紺の山肌

が、光を含んだ藍色の空にほのめく。どうかすると、その山山の輪廓が、一抹の夕雲に溶込んで了ふ。すると、その夜から降出した柔かな雨が二日も三日も降りつづく。それがあがると、もう春なのだ。北相模の高原の山裾の村には、かうして春がおとづれるのだ。

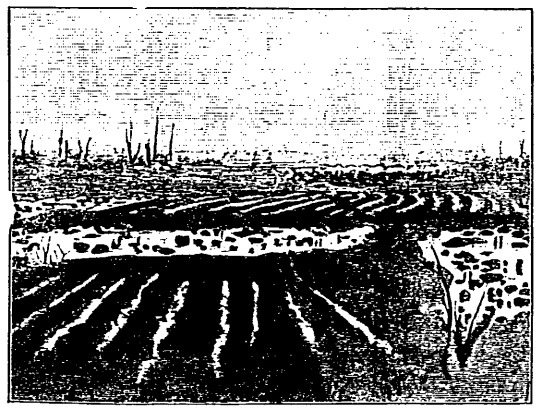
春が深くなると共に麥が伸びる。桑が芽を吹く。麥畑・桑畑の間を帶のやうに延びた野道を十二三町、二つ三つの部落と一つの驛とを通りぬけて、その驛の盡頭の高臺にある小學校へ、私は尋常を四年、高等を四年、前後八年通つたのである。

私はへんくつな子供だつたので、往きにも復りにも、友達の群を離れて一人の時が多かつた。私は一人寂しくその野路をあるきながら、麥笛をこしらへては吹きならした。麥笛――田舍育ちの人は皆知つてゐよう。あの柔かな麥の莖を二三寸の長さに切つてこしらへた小さな笛、唾をつけて吹くと單調な音を出す小さな笛。私は好んでそれを吹いた。それを吹き〳〵長い野路の盡きるのを忘れて歩いた。私は今でもあの麥の莖の甘酸つぱい舌ざはりをあり〳〵と喚び起すことが出來る。その頃の私は、悲をも、喜をも、寂しさをも、あこがれをも、あの單調な麥笛のしらべの中に、自由に歌ひ出すことが出來たのだつたが……。

麥笛で思ひ出したが、まだ笛にする事が出來るまでに麥が大きくならないで、黑い土に飛白の模樣を置いてゐる頃、だから勿論冬のうちの事だが、私たちはよく麥踏といふ事

をさせられたものだ。霜柱で根が拔けあがるのを防ぐため、また、より強く伸びる力を刺戟するために、二三寸位に生えあがつた麥の芽をわざと踏みつけてやるのだが、その麥踏の時、土の中から栗の實だの樫の實だのが、ころ〳〵と足もとに轉び出ることがあつた。「こんなところにどうして」と、不思議に思つて聞いて見ると、祖父は次のやうなことを話してくれた。それは、かけすが山から啣へて來てそこへ埋めておいたのだ。かけすはそれを埋

かけす　鵲巢　鳩よりはやゝ小形の鳥　かしどりともいふ



春　早

白鳥省吾　詩人　宮城縣の人

める時、空にある雲を心覺えにして、その雲の下に埋めるのだが、その心覺えの雲は、すぐに動き去つたり消え失せたりする。かはいさうにかけすの奴、折角埋めて置きながら、見附ける事が出來ないのだ——。

私は子供ごころに、心からかけすを憐んだことがあつた。それは唯かけすばかりの悲では無いといふことを、二十年後の私はよく知つてゐる。

（わが小畦板）

一二　開墾小屋

白鳥省吾

草生ひ茂る高原の
ところ〳〵に落葉松、
そのきはまるところに遠い山脈。

高原の路は人のけはひもなく、
路傍にある大きい山梨の木の下に
荷馬車や人の休んだあとも
なつかしく寂しい。

高原には人間の匂がない。
ふと麥畑の麥の穂が風にそよいでゐるのを
見た私は、
いつたい誰が耕作するだらうと思つたが、
やがて四五軒の家があつた。
二里の間に家といふのはそれだけ

あゝそれらの人の耕す地面には、
この高原にとつて巨人の一つの足跡に過ぎ
ない。
しかし人間はこの土を征服しようとする、
人と人との協力はその寂しさをも征服しよ
うとする、
家の前には鷄も遊んでゐる、
子供も遊んでゐる。

雪解けのころになると、
きまつて一つ二つの人骨が出るといふこと
だが……

旅人も行き暮れる銀色の雪のなかに埋れて、
幽かにたちのぼる人家の煙よ。

私があの高原を通つたのは八月であつたが、
空には雲雀が啼き、
鶯が落葉松に啼交してゐた。
いま侘びしい冬の日に
遠くあの高原の人々を思ひ浮かべる。

一三　哲人聖德太子

高島米峰

高島米峰
宗教家
評論家

聖德太子
御名は厩戸皇子
第三十一代用明
天皇の第一皇子

私の最も崇敬する哲人を過去に求めて、私はまづ聖德太子を擧げざるを得ない。聖德太子の偉德・鴻業は山の如く高く、海の如く廣く、到底筆紙のよく盡くすところでない。憲法十七條を定めて平和の理想を宣言し、この理想實現の爲には、佛教の信仰を以て國民の精神生活の根本基調とすることの切要なのを認め、更にこれに依つて、天皇中心主義を闡明して、建國の精神を振作し、また官位十二階を定めて人材登用の門を開き、以て閥族跳梁の弊を一掃して、內政を充實し給うたので、日本の面目はここに全く一變するに至つたのである。これが爲に當時世界の最大强國として、最も文化の進歩した支那――支那は恐らく日本をその屬國ぐらゐ

聖德太子

推古天皇　第三十三代

隋　支那の中古時代南北朝の對立を統一して天下を治めたが、僅かに三代三十七年で亡びた

煬帝「ヨウダイ」　隋の祖文帝の次子、父を弑して即位し、性奢侈を好み土木を興し、又外征を好んだ

にしか考へてゐなかつたであらう。それ程に日本の世界的地位は低いものであつた。――と對等の國交を結ぶことになつたといふのは、實に聖德太子の偉大なる功業である。

聖德太子は推古天皇の十五年に、遣隋使發遣のことを決定し給ひ、小野妹子が使節に任ぜられて、その年七月に出發した。この年は隋の煬帝の大業三年で、妹子が煬帝に差出した國書の冒頭には、

日出づる處の天子、書を日沒する處の天子に致す、恙なしや。

とあつて、實に堂々たるものであつた。從來支那は自ら中國を以て任じ、東夷・南蠻・西戎・北狄と、四方の國々を野蠻國あつかひにしてゐたので、日本の如きも所謂東夷の中の一つ

裴世清　隋煬帝の臣

ぐらゐに考へてゐたのであらうが、その日本から、突如としてかうした對等な禮を以て書を贈つたので、煬帝は甚だ不快に感じ、一度はこれを却けたのである。が、しかし、これほどの國書を差出す國は、一體どのくらゐな文化をもち、國民の生活がどのくらゐ進んでゐるか、ともかくもその實情を知る必要があると思つたのであらう、裴世清といふものを使者として我が國に遣はす事となり、裴世清は小野妹子と共に、翌年四月難波に着いたのである。この隋使裴世清の報告が、日本と隋と對等なものにするか、それとも依然として屬國あつかひにするかといふ最も重要なものであつたので、聖德太子はその待遇については、頗る心をお籠めになつたらしい。まづ朝廷では飾船三十艘を以て一行を難波

海石榴市　大和國磯城郡三輪村。今は荒村なれど古は繁華な市であつた

の江口に迎へ、難波の新館をその旅館に充てて、優遇到らざるなく、また彼が都に入る時には、飾騎七十五疋を以てこれを大和の海石榴市の衢に迎へさせた。天皇の謁を賜うた時には、有司百官が、定められた冠位に隨つて、綺羅星の如く宮廷に居並んだといふので、さすがの裴世清も、すつかり感服してしまつたらしい。その結果、彼が歸國の時、第二回遣隋使として再び小野妹子を遣すこととなつた。その時妹子の持つて行つた國書は、やはり聖德太子の筆に成つたもので、實に大文章であつた。さすがの隋の煬帝も、裴世清の報告やら、かうした堂々たる二度の國書やらで、もう否應なしに、對等な國交を結ばなければならないことになつて、支那は日本を完全な獨立國として認めたのである。これ實に聖德太子の理想の一面が、遺憾なく實現したのであつて、我が國が金甌無缺の國體を維持し得られたのも、これ等に淵源するところが頗る多いのである。

九面觀世音菩薩像

聖德太子の御事業は、右に述べた外、外國文明の輸入でも、美術工藝の奬勵でも、歴史の編纂でも、憲法の創制でも、冠位の制定でも、暦法の研究でも、何一つとして偉大でないものはないが、その中でも最も重要なものは即ち天皇中心主義の徹底、最も意義あるものは即ち佛教の興隆、最も華やかなものは即ち日隋對等の國交であつて、これ私が哲人として崇敬し讃嘆し奉る所以なのである。

齊明天皇
第三十七代
今上天皇
第百二十四代
御名裕仁

惟ふに、日本開闢以來、皇太子で攝政の大任を帶びさせられた方は、僅かに御三方しかましまさぬ。しかも、其の中の御二方が、二十歳代の青年でこの大任を帶びさせられたことは、現代學生の最も尊い龜鑑でなくてはならない。その御三方と申し上げるのは、推古天皇の攝政皇太子聖德太子、齊明天皇の攝政皇太子中大兄皇子、及び今上天皇にましまし、聖德太子は二十歳、中大兄皇子(後の天智天皇)は三十歳、そして今上陛下は二十一歳の御時に、攝政の大任を帶びさせられることとなつたのである。聖德太子攝政の時代には、日本が內に充實し外に躍進したといふ事實に考へ合はせても、昭和の日本はどうしてもまた、我が聰明英邁にわたらせられる今上陛下の御威德によつて、更に一段と內に國力を充實し、外に國光を發揚すべきことを、確信せざるを得ないのである。

芳賀矢一
國文學者
文學博士
東京帝國大學教授
國學院大學長
福井の人
昭和二年歿
年六十一

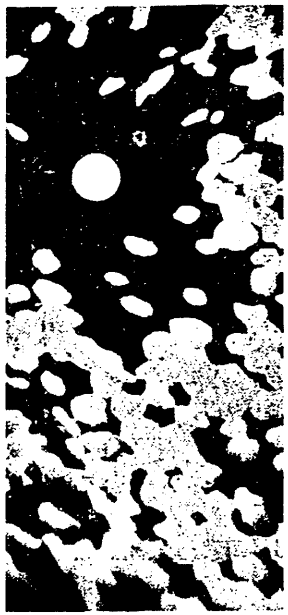
一四　月雪花

芳賀矢一

赫々たる活動の日の光、西に沈めば、玲瓏たる一輪の月、休息の夜を照す。月の光は溫和で、日光のやうに峻烈ではない。日は赫々として仰いで見る事も出來ないが、月はながめて親しみ易い。太陽が一たび出づれば、群陰皆影を伏して、大小の有象無象悉く照破されるが、月輪は萬象を一つに包んで貴賤貧富の分別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である、慈愛の光である、炎熱を伴なはない淸涼の光である、皎潔・無垢・崇美と稱ふべきやさしい光である。休息・安

うちむかふ　徳川時代の歌人荷田春生子の歌

靜の夜に最もふさはしいこの光に對しては、誰しも人生の慰藉を感ずる。詩的情緒が油然として湧く。晝の間は猛獸と鬪つて居る熱帶の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱國の椰子の蔭、寒地の氷の家、眺める人の心々は違ふであらうが、隈なく世界を照らす月光の、人間の胸懷に泌渡ることは、恰もその影の千草の玉毎に宿るやうなものである。「うちむかふ月は一つの影ながら、うかぶは千々の思なりけり」である。


月

東西・古今、喜悲・哀歡の情熱は、幾萬回となく、幾億回となく、

花ならば　僧仙覺の詠　新續古今集

三千世界　唐の詩人白樂天の詩中の句

この光に向かつて訴へられた。之を嗟嘆し、之を吟咏した詩歌は、世界名國の文學に充ち滿ちて居る。天文學者は云ふ「月は地球の衞星で、全く死んだ冷塊である」と。この冷たい光が、古往今來どれ程の暖かみを人間に與へたか、又與へつゝあるか。月は永久に人間の良友である。

雪は月よりも一層冷たい。貧富・貴賤の差別なく、その純潔の色を以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓も茅屋も皆同じ色に埋められる。げにや、「花ならば咲かぬ梢もまじらましなべて雪降るみ吉野の山」といふやうに眼に入るものすべてその下に包まれてしまふ。「三千世界銀成レ色チ、十二樓臺玉作レ層チ」の美觀は、一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天

一條の川を長々と川一筋や雪の原（凡兆）

から落ちて來るこの純白の色に比べては、地上の色も甚だしく汚く感ぜられるのである。霏々と散り、紛々と飛んで、唯一條の川を殘して、山といはず、野といはず、瞬くうちに瓊玉を敷く莊嚴の觀は、眞に人目を眩せしめるものである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花・紅葉、色色の眺はもとより美しいに相違ない。花の散つた後の新綠の色も目の覺めるやうな鮮かな心持がするが、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に、地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照

雪

の妙、變化の奇、造化の巧を盡くしたものではあるまいか。一年中蓮の花の開いて居る極樂淨土は、決して我等の世界程樂しいものではないであらう。

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花のさまく、どれを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり咲亂れるのは、人生としてはあまりに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、芳しい匂さへ有つて居る。我等の食用のために作つた菜や大根などの花でも、無限の詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培ふ花の價を生じたのは無理はないが、山の花、野の花、何れも月や雪と同じ樣に、一文錢を要せぬのである。人生に花なくんば、どれ程

の寂寞を感ずるであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、床の間に一輪の花は必要である。これは寧ろ花を貴んで、その濫用をつゝしんだのである。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。人は死んでも花を離れぬのである。月雪のながめはその皎潔を愛し、その清淨を貴ぶが、花はその艶麗華美を以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ・花やか・花々しい・華美・華麗・華奢等の語は、皆花に本づいた語である。花に關する古今東西の詩歌は擧げるだけ愚かである。余は唯「花をし見れば物思もなし」といふ古歌を以て、すべてを總括し得べしと信ずる。

花

花をし見れば「年ふれば齢は老いぬしかはあれど花をし見れば物思もなし」（古今集）

月・雪・花三つのながめは各その特長がある。いづれを前、いづれを後といふことは出來ぬ。

山櫻花の（新古今集）

山櫻花の下風吹きにけり
木のもとごとの雪のむらぎえ

冬ながら（古今集）

これは花を雪にたとへたのである。

冬ながら空より花のちりくるは
雲のあなたは春にやあるらん

笠は重し　謠曲「芭蕉」中の句

これは雪を花にたとへたのである。

「笠は重し、吳山の雪、靴は香ばし、楚地の花。肩上の笠には無影の月を傾け、檐頭の柴には不香の花を手折る。」

これは雪を月と花とにたとへたのである。花を賞して月

アイスランド　歐洲の西北洋上にある島　Iceland

を愛せぬ人は無い。月花を愛して雪をめでぬ人も無い。思へば世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に鎖されてゐるアイスランドでは氷は即ち人の家である。この地方には寸紅の目を樂しませるものも無い。又之に反して、全く氷雪を知らぬ地方もある。一片の布を纏うて生息する熱帶の住民は、瓊玉を綴る雪の奇觀は見たことがない。瓦斯電燈の光に不夜城の觀を呈して夜更を知らぬ繁華な倫敦の住民も、秋冬の半年は美しい月の光を見ることが出來ない。我等日本人が、昔も今もこの三つの眺を擅にすることを得るのは、眞に天與の幸福ではあるまいか。

月雪花のながめは、古人の歷史が加つて一層その感興を

世々を經て　伊藤仁齋の歌

年々歲々　唐の劉廷芝の句

八波則吉　國文學者　第五高等學校教授　福岡縣の人

增す。

世々を經てながめし人の數にまた
われをもゆるせ秋の夜の月

月は古來の歷史を照らす鏡である。

年々歲々花相似、歲々年々人不同。

鬢の霜、頭の雪。人生の感は花を見て益〻繁く、雪を見て愈〻多くなる。二千五百年來、月雪花三つの眺を有し得たる我等祖先の遺蹟は、如何に多くの感興を我等に傳へたるよ、如何に多くの追慕を我等に催さしむるよ。

（月雪花）

一五　不斷の努力

八波則吉

世には創造を偶然の產物であると解する人もあります。

ニュートン　Newton (1642—1727) イギリスの大數學者物理學者

ダーウキン　Darwin (1809—1882)

或人がニュートンに發明の祕訣を尋ねましたら、「ただ不斷の努力である。」と、答へたさうです。林檎の落下を見て偶然引力の理を悟つたと傳へられてゐるニュートンの言として「不斷の努力」といふ語は、特に味はふべきではありませんか。

ニュートン

ダーウキンは英國の科學者で、進化論を首唱して世界の學界に著大な寄與をなした人でありますが、嘗て「科學の人としての余の成功は、科學に對する愛情の賜物である。」と言ひました。如何なる問題に就いても之を省察する際、彼の強い愛の力と、彼の無限の忍耐力が無くてどうして解決が出來ませう。故に私は創造の本源は「不斷の努力」であり、又「愛の力」であると斷言します。

ペリー　アメリカ合衆國の海軍日本開國使節として來朝した人　Perry (1797—1858)

我が國が日本の日本となり、更に進んで世界の日本となつて、五大國の一に列するに至つた今日の文化は、抑、誰の力でせう。問はずとして知る。上は列聖の御稜威と、下は我等の祖先・先輩者の苦心經營の結果であります。其の間にはさだめし血の出るやうな苦みもあつたでせう。例へばペリーが浦賀に來た時、我等の先輩は方々の寺から半鐘を借集めてこれを海岸に並べて、日本にも大砲が此の通りにござるぞと見せかけたさうです。船の上から望遠鏡で覗いた外人には、計略の底が見え透いて、嘸や

ンキウーダ

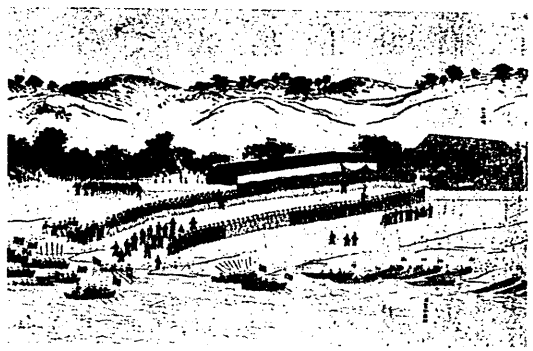
スタンプ
Stamp
印

噴飯の極であつたでせうが、此の一些事でも、負け嫌ひな日本人の氣性と、無い袖を無理に振つた先輩の苦衷がありありと察せられるではありませんか。

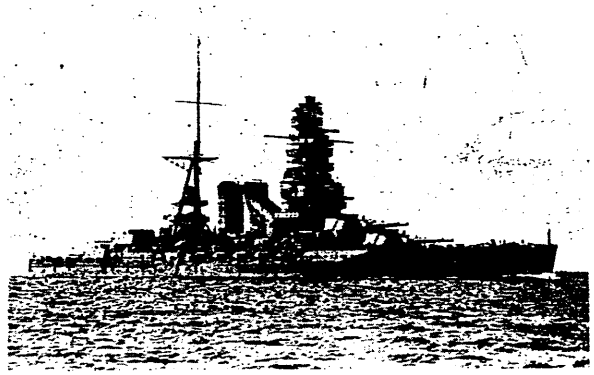
「問ふは當座の恥、知らぬは末代の恥」。

と覺つた我等の先輩は、爾後事毎に外國人に師事して、一哩の鐵道を敷くにも、一枚の葉書にスタンプを捺すにも、皆外國人に敎はりました。

船といふ船の船長は悉く傭外國人でした。それがどうです。今は數ある商船に唯の一人も傭外國人の船長は居ません。一千餘噸の潛水艦も、四萬餘噸の戰鬪艦



ペリー來航の圖



も、我等日本人の手一つで之を建造することが出來るやうになりました。從來留學生と稱してゐたのが今では在外研究生と其の名を改めることになりました。一事が萬事です。目下排日々々と到る處で我が同胞が排斥されてゐますが、排日の異名が悲日であるを知る時、我々の肩幅は却て是が爲に其の廣さを增すの心地がします。

我が國の地位を斯くまで高くし、我々の肩幅を斯くまで廣くしてくれたのは、我等の祖先

と先輩、少くとも我等壯年者までの力であつて、諸君自身は、今までの文化には未だ何等の寄與貢獻をなしてゐないのであります。而も人生の目的は＋Aであります。諸君は將來果して如何なるAを我が國の文化の上に＋しようとするのでありますか。

大器は晩成します。諸君の天才的天性に加ふるに、此處三箇年乃至六箇年の學生時代に於ける教育と經驗の堆積に依つて、十二分に諸君の個性を擴充し、他日振天動地の大發明、大發見、大創作を爲すの素地を作られるのでありませう。その基は日々撓まざる不斷の努力でなくて何でせう。

一六　清淨の國

大町桂月

大町桂月　名は芳衛　文章家　大正十四年歿　年五十七

敷島の本居宣長の歌

我が國の特質は少からざれども、特質中の特質ともいふべきは、清淨の國なること是なり。日本國民は一般に清淨の美を愛す。その心清淨なり、其の衣、その食、その家清淨なり、その國一體が清淨なり。清淨の美を解せざるものは到底日本を解するを得ざるなり。

敷島の大和心を人問はば
　朝日に匂ふ山櫻花

この歌が日本人一般に愛誦せらるゝは、國民精神の清美を歌ひ出でたればなり。一體、朝は一日中にて最も清々しき時なり。空に些かの曇もなき朝、東天に朝日の輝き出づるは實に清爽なるものなり。その清暉に、櫻花中の粹たる山櫻のぱつと映發せるは、なほ更に清々しきものなり。朝

晴天・日の出・山櫻、これだけの好き道具がそろはば、何人か爽快を覺えざるべき。これ即ち大和魂の本體なり。大和魂は即ち清淨の粹なり。櫻花は散りぎはが潔し、日本男兒の死を惜しまざるに似たりなどいふは枝葉のことのみ。

田子の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ
富士のたかねに雪は降りける

田子の浦ゆ　山部赤人の歌　萬葉集に出てゐる

絲波一面鏡の如き田子の浦、そのあなたに何處より見ても形の變らざる扶桑一の靈山の、八朶玲瓏、天をさゝげて立てるは、これまた清淨の極みにあらずや。この歌が名歌として世に喧傳せらるゝも、畢竟この美の琴線に觸れたればなり。

月雪の中や命のすてどころ

月雪の　榎本其角の句　江戸時代の俳人

（りょ時坂御）　山　十二　四

十四夜
元祿十五年十二月十四日の夜

其角
榎本氏
芭蕉十哲の首
寛永四年歿
年四十七

大高子葉
名は忠雄
通稱は源吾
元祿十六年切腹
年三十二

積雪白うして四邊に聲なく、十四夜の寒月獨り天に冴えたり。この夜、この雪を踏み、この月光を浴びつゝ、氷刄をきらめかして亡君の仇を報いんと討入るは、決死の四十七烈士。天も清し、地も清し、人も清し。當夜吉良邸の隣屋敷にて催されし俳會に列せし其角その人は、元來多血性の快男子にて、清淨の美を心解せる人なり。而して義士の中に加れる大高子葉は實に其の俳友たり。月清き其の雪の夜、無量の感慨は發してこの十七文字となる。實によく復讐の眞況と本體とを捉へ得て、清淨の美を極めたりと謂ふべし。

歌も俳句も、秀逸と稱せらるゝものは、多くはこの清美を捉へたるものなるが、その他の美術・文藝、一として此の心の結晶ならざるはなし　花に對する感じの如きも亦然り。

西行　俗名佐藤義清　鎌倉時代の歌僧　承久元年歿　年七十三

西行の歌　何事のおはしますかは知られどもかたじけなさに涙こぼるゝ

近時外國趣味の入來たるに連れて、妖艶なる草花も輸入せられたれど、梅や、櫻や、蓮や、菊や、水仙や、昔も今も日本國民の一般に愛する花は何れも清淨なり。建築に於ても亦然り。日光の東照宮、淺草の觀音堂を見る時、我々日本人はたゞ華麗を感ずるのみにして、尊さを感ずること薄し。然るに一たび去つて伊勢神宮に詣でんか、千木高知れる建築、清淨の美を極めて、そぞろに西行の歌のしのばるゝを覺えずんばあらず。若し伊勢神宮に向かつて壯大を求め、華麗を求むるものあらば、これ眞の日本國民たる素質に缺けたる所あるものと謂はざるべからず。

滄海の中にありて山青く水清き我が日本は、土地そのものがすでに清淨なり。開闢以來未だ曾て外國に汚されざる我が三千年の歷史がすでに清淨なり。他民族の血液を多く混ぜざる我が民族の血統がすでに清淨なり。加之、我が國民は善を好みて惡を憎み、正に就きて邪を排し、直を愛して曲を嫌ひ、弱を扶けて强を挫き、よく忠に、よく孝に、よく義に、よく勇に、風流をさへ解して、もののあはれを知れる清淨なる國民なり。我が日本が古來東海の君子國と呼ばるるも亦宜なるかな。

（桂月全集）

矢田挿雲　小說家　俳人　金澤の人

一七　賴宣卿行狀記

矢田挿雲

家康の第十子長福丸は、わづか四歲でその日の川狩に供をした。行手に小川があつて、橋が無かつた。家康は馬上から

「長福丸を馬に乘せて、獨りであの川を渡らせて見い。」と命じた。瞬間、左右の士は當惑氣に顏を見合せたけれど、當の長福丸は喜び勇んで鞍に跨り、しかと手綱を執つた。

さすがに馬の口取りが左右について、腫物にさはるごとく、徐々に川の中へ導いた。長福丸は始めは喜んでゐたが、幅五間ばかりの小川の中程に來ると、瀨の流が恐ろしくなつたものか手綱をはなして、馬の首にしがみつきさうにした。

「和子樣、おあぶなうございます。」

と右と左とから、口取りが手を伸ばして、長福丸の手を執つた。家康は岸にゐて此の樣を見て、

「見苦しい。その手を放さぬか。」

と聲をかけた。

「はつ。」

と答へて二人とも、長福丸の手を離した。それで長福丸は泣き出すかと思つたら、却つてシヤンと身體を持直して、手綱を執り無事に川を渡りおほせた。

矢田挿雲

家康は老年に及んで長福丸を儲け、その成人を引のばすやうに祈つた。自分の年を思ひ、長福丸の頑是ないのを見ると、いつも〳〵日暮れて道遠しの感に堪へなかつた。

家康が七十五歳で薨じた元和二年に、長福丸は十五歳と

駿遠
駿河遠江

なつた。八歳にして水戸から駿遠二國に移封されてゐた長福丸は、父の死後四年目に紀州和歌山へ移封された。德川頼宣卿が長福丸の後身である。

或時頼宣參府の折、伊勢松坂から渡海する段になつて、嘗て無いひどい嵐に出逢つた。

頼宣は宿の欄干に立つて、沖の雲を眺めてゐた。まだ日は高いのに、沖の方は黑い雲の爲に夕方のやうに暗く、それでゐて魔形の雲を、魔形の雲が追駈けて行くのが見られた。その雲を見てゐると、頼宣は次第に氣が焦つて來た。晩春の風が方角無しに吹き廻つて、何處からか舞ひさがる落花が頼宣の頰を掠め、又その數片は髷にまつはり着いた。前鬼後鬼のやうな格好をした雲の亂舞も狼藉なら、貴人に戲れかゝる山櫻も無禮だと思はれた。とかく浪風が暴威を逞しうして、我が行手を阻むのは許して置けぬ、かばかりの嵐を增長させて、萬物の靈長たるものが尻込みして成らうか——彼は鬢髮を風に亂しながら、何としても、此の大時化を見事征服せずにおかぬと息卷いた。

頼宣卿木像

「申の刻から船出すると水主どもに傳へよ。」

と左右の言は少しも耳に入れず、兩肩を怒らせて、浪風に食つてかかるやうに言附けた。

誰一人、はいと答へる者は無い。

「わからぬか」。

と賴宣が一喝した時、番頭の松平三郎兵衛忠尙が、

「あいや、拙者が切腹するを見屆けてから、水主どもに御諚を傳へるが良い。殿樣もその上にてお船に召されますやう」。

と賴宣の眼の下にピタリと坐つて、早くも肌を擴げかかつた。

「そちは腹を切るか」。

と賴宣が無念さうに尋ねると、

「御覽になればおわかりになります。武士たるものがやみやみ魚腹に葬られて成りませうや」。

「待て、早まるな」。

桑名　伊勢海に面せる都會

池鯉鮒　現今の愛知縣知立町

と不機嫌らしく聲をかけて賴宣は奥に入つた。

急に道中模樣變へになり、桑名まで陸行、桑名で風が凪いだので船に搭じ熱田に渡つた。賴宣はあの誇り顏に荒れすさぶ浪風へ、船の舳先を突つかけて乘切つたら、人生無上の痛快事であつたらうと、平穩單調な航海を終つた船を、つまらなく見返りつゝ上陸した。

池鯉鮒まで來ると、意外にも前方から、忠尙が五六人の供を連れて出迎へに來てゐるではないか。賴宣は狐につまれた心地で、

「そちは」。

といふかつた。忠尙は土に頭をつけ、

「御安着おめでたう存じます。拙者は一足お先に松坂か

ら海路を――」

「なんと申す、余を出し抜いて。」

「は、はつ、海を恐れてお供を辭するに當りましては末代までの不忠でござれば、御發ちをお見屆け致しましたる上、鯨船に便乘仕り、昨日吉田に着き、お着きをお待ち致しまして、ござります。」

「不屆者奴がッ。」

と賴宣は横を向いて行き過ぎた。

此の事があつて以來、賴宣は忠尙にやさしい顏を見せなくなつた。泊り〳〵に番頭として、是非忠尙が目通りを願はねばならぬ公用があつても、賴宣は目通りを避け、他の者の取次で用を濟ませた。

吉田　愛知縣三河灣に面す

江戸に着いて暫くしてからの或日、賴宣は忠尙一人を茶室へ呼び出した。忠尙はお手討を覺悟して入室した。

「近う。」

「麗しき御尊顏を拜し――」

「うむ、そちも健固で結構、池鯉鮒以來ぢやのう。」

「……」

「あの節の、そちの處置、忠節は忠節なれど淺慮であるぞ。」

「はつ。」

忠尙は次の瞬間、首筋に白刃を豫想しながらも、淺慮のわけだけは聞いて死にたいと思ふ。

然るに賴宣は、寧ろ自分の言葉を樂しむやうな調子で、

「どうぢや、そちはそこに氣がつかぬか。」

「はつ、御供を拔けましてお先に御不禮仕りましたるかどは」。

「さうでない。あのまゝそちの船が覆つて、そちが溺れたら何とする」。

「それこそ本望で」。

「それが淺慮――それをさせて良くば、余は始めにそちに腹を切らせた筈」。

「なれども、拙者は身を捨てて、御渡海をお諫め致せし上からは」。

「先づ聞け、余は渡海を恐れて廢めたのでは無い。家來一人を犬死させるが何よりも惜しうて、船を見合せたのだ。その心も知らいで、己が明かしを立てることのみ考へ、すんでの事に余が心づくしを、そちは水の泡にするところであつた」。

忠尙は、たうとう泣かされてしまつた。疊に顏を伏せ、肩衣に浪を打たせて泣いてゐる忠尙を、賴宣は見おろして、

「もつとも其方の忠節を褒める道は知つてゐる。されども、其の樣な處置を褒めたなら、此の後とても不慮の事にあたら家臣を犬死させねばならぬ、それで、知りつゝ疎遠に致せしぞ、ゆるせ」。

「あ、ありがたきそのお言葉」。

「もう泣くでない。今日は茶料理を遣はす。くれ〳〵命を粗略に致すな」。

と手づから茶を立てて進めた。その上忠尙が退出する時、

高山樗牛　名は林次郎　文學博士　文藝批評家　山形縣の人　明治三十五年歿　年三十四

熱海　靜岡縣伊豆東海岸の溫泉地

賴宣は差料を一口與へて

「本日の事他言無用。」

と口止めとした。

（改造所載）

一八　我が袖の記

高山樗牛

熱海の冬

熱海の二月は、誠に樂しき哀深き冬の暮しなりき。よそならば、吹雪に閉ぢられて、日影も薄き冬の眞中も、名にし負ふ熱海なれば、こち吹く風も寒からず。睦月はじめの梅が香は、早くも春を告渡りて、野邊の燒跡の萌えそむるは、人の心も時めく頃か。苫屋どもに岩海苔の薫れるもをかしく、蘆の屋に心細く立昇る煙も長閑なり。

大島がね　伊豆國大島の三原山

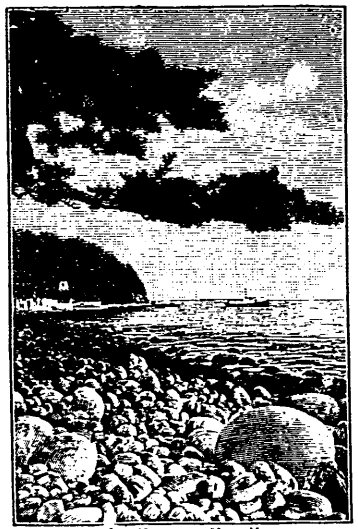
沖の小島と　箱根路を我が越え來れば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ　源實朝

初島　熱海の東南海上にある

魚見が崎　熱海の南端の岬

三保　靜岡縣安倍郡駿河灣に斗出して清水港をいだく砂洲

海原遠く見渡せば、相模・安房の山々、雲か霞の姿おもしろく、大島がねに立つ煙の風にたなびけるに、水や空とも分ちかねたり。「沖の小島」と誰が詠みたりし、初島わたり漕ぐ船唄の、寄る浪毎に聞ゆるもゆかしく、魚見が崎のこなたより、渚を傳うて砂白く松青きほとり、濱千鳥の群れ飛ぶ樣もいとをかし。後ろには日金・十國の山々を負ひ、前には天空海濶の間に一灣の春を擁する風光は、筆にはなか〳〵に及びがたし。



熱海の海濱

三保の春

清見が關　今の靜岡縣興津町を指す、關は今の清見寺邊にあつた
田子の浦　駿河灣の海邊
江尻清水　共に今の清水市の内
龍華寺　清水市にある法華宗の寺こゝに栫牛の墓がある

松風遠く吹合はせて、波の音も微かなる、物思まさる夕なりき。我ひとり清見が關の宿を立出でて、三保の松原に遊ぶ。田子の浦曲の夕凪に、千鳥の聲もいと稀なり。江尻・清水をはや過ぎて、龍華寺の輪塔を右手に見る。袂に寒き山風に入相の鐘を吹送りて、初春の哀一入深し。三保に辿り着ける頃は、月漸く上り、清見潟の水煙は關路遙かに立罩めて、富士の高嶺に雪の色白し。見渡せば、一帶の松林、木深く生ひ茂れるかな。木立の篠へる月の明りに、殘んの雪の色冴えて、杜の下道杳かなり。波の音漸く近くして、我は羽衣の松に添

羽衣の松

柳生但馬守「ヤギフダジマノカミ」　名は宗矩　徳川初期の劍法家、三代將軍家光の輔導役　正保三年歿　年七十六
新井白石　名は君美　政治家、學者　享保十年歿　年六十九
寛永十四年　明正天皇の御代　將軍家光の時
有馬玄蕃頭豐氏「アリマゲンバノカミトヨウヂ」　筑後久留米の城主

うて立ちぬ。羽衣の松は我が年久しく思ひこがれしものなりき。よしさらば、今宵は月と共に立ちあかさんかな。

松は早く枯れて、幹の朽ちたるが殘れり。そのもとにゆかりを誌せる石ぶみありしが、月の光おぼろにして、今は見えわかず。あはれ、波の音と松風とのみぞ、今も昔に變らざりける。

（栫牛全集）

一九　柳生但馬守

新井白石

寛永十四年十一月十日、有馬玄蕃頭豐氏の家に散樂（さるがく）ありて、人々多く集り見る。宗矩もこゝに行向かつて酒宴半ばなるに、日已に未の終り許りになつて、宗矩が郎等來り、主を呼出して、「君は未だ知し召されずや、肥前國高來の郡の土民

松倉殿　肥前島原の城主松倉重政
有馬の古城　島原半島の南端にある口之津の原城
有馬氏の舊城　有馬氏の舊城
板倉内膳正「イタクラナイゼンノカミ」　名は重昌　寛永十五年島原の亂に戰死　年五十一
品川　今の東京市品川區　舊東海道第一次の宿
川崎　今の神奈川縣川崎市　舊東海道五十三次の一、品川宿の次
御前　徳川家光

百姓等悉く耶蘇の門徒にて、守護松倉殿に叛き、有馬の古城に立籠るよし、筑紫より早馬來つて告げ申すに依りて、板倉内膳正殿、追討の御使を蒙り給ひ、はや御發向候ひぬ。と申す。宗矩聞きて、さらぬ體にて座に歸りて、亭主豊氏に向かひ、「急ぎて宿所に歸るべき事出來て候。脚早き馬貸し給へ。といへば、鞍置きて引立つ。急ぎ打乘りて、西を指して馳行き、品川に至りて、「板倉殿は過ぎしや。」と問ふ。「今は遙かに延びさせ給ふらん。」と答ふ。鞭鐙を合はせて馳行き、川崎に至りて問ひ給へば、「板倉殿は今は二三里も隔らせ給ふべし。」と答ふ。日は已に暮れなんとす。せん方なくて引返し、城に登る。

日はとく暮れてけり。近く侍ふ人を以て、「宗矩申すべき事あつて伺候しぬ。」と申しければ、やがて御前に召されて、「何事にか參りし。」と尋ねさせ給ふ。宗矩畏まつて、「今日さる人の許に酒盛し候に、筑紫にて逆徒起り、内膳正追討の御使を承り馳向かふと承りし程に、仰の旨と稱し、止めばやと存じ、馬を馳せて追懸くれど追附かず、日暮れ候故に此の由を申さんとて參りて候。」と申す。「何に由りてか、重昌を止めんと致しけるぞ。」と仰せ下されしかば、「君は只管の土民百姓等の叛逆せしと思召さるればこそ、追討の御使かく輕く候ひつれ。すべて宗門に就いて起る軍は、大事の者に候。此の定にては、重昌必ず討死仕るべし。如何にも謀りて止めばやと存じ候ひぬ。」と申す。以ての外に御氣色損じ、御座を立たせ給ふ。宗矩次の間に伺候して、夜更くれども、罷り出てず。

此の由を聞し召して、重ねて御座に出でさせたまひ、宗矩

伊勢の長島　元亀元年尾張國小木江の城將織田信興が長島の一向宗一揆に殺されたので元亀二年信長その一揆を攻め天正二年漸く陷れた

大阪の城　天正四年信長は大阪の石山城なる本願寺の一向宗徒を伐つた。

を召す。「重昌死すべしとは何故かくは申すぞ。」とありし時、宗矩「さん候。それ兵の道は勇を以て旨とつかまつる。勇士は必ず死を懼れず。三軍の士をして悉く死を懼れざらしめんことは、古の能く兵を用ふる者も及び難しと承りぬ。凡そ下愚の人、法を深く信じ候者は、我が法を固く守りて、死するを以て身の悦とす。これ百千の衆、悉く期せずして、必死の勇士と變ずるの術にて候。遠く例を引くまでも候はず、織田殿兵威を以て伊勢の長島を攻めて、多くの大將を討たせ、諸卒を失ひ、年を重ねてやう〳〵に城を落さる。攝津國大阪の城をば、終に落し得ず、天子の勅命をかりて中直りして、軍は終りて候。三河國の一揆は近く御家の事に候。去りし大阪の軍に、重昌いまだ年若く候時だにも、數十萬騎

三河國の一揆　永祿六年三河國に起つて家康に背いた一向宗徒の一揆

大阪の軍　慶長十九年(一六一四)大阪冬の役　重昌時に年十八

の中に只一人擇み出されて、大事の使承つたる者なれば、是等の兇徒を滅さんに、何事かあるべき、且は當時御使承る上は、誰か其の下知に背くべきなど思召されたれば、事の違ひ候はんか。重昌が今少し位も高く、祿も厚く、又年頃重き職をも掌つて、常に世にも人にも畏れ敬はれて候はんには、誠に好き御使にこそ候べけれ。今の重昌の身にて、西國の大名等の軍勢を催して城を攻めんに、一度は御使を承りたるに畏れて其の下知に隨はんが、思ふにも似ず攻めあぐみて候はんには、重昌如何に思ふとも、心に任すべからず。其の時に至りなば、御一門の人々か、さらずば宿老の中を擇みて、重ねて御使に遣はさるゝよりの外あるべからず。さらんに因つては、重昌何の面目あつてか、生きて再び關東に還りて

見參には入り候べき。あつたらしき御家人を失ひ候はんこと、誠に惜しく候へども、猶それよりも、御使を承りたる者を、土民百姓のために討たせて候といふことは、永き天下の御恥辱にこそ存ずれ。あはれ宗矩御許を蒙らば、追附いて、能くこしらへて、召具して參り候べし。」と、憚るところなく申しければ、御後悔の色見えさせ給ひしかど、更にそれも叶ひ難くや思召されけん、夜いたく更けたり、罷り歸りて休み候へ。」と仰せければ、御暇賜はりて、御前を退出す。後に思ひ合はするに、宗矩が申せし所、掌を指すよりも明かにぞ候ひける。

（藩翰譜）

二〇　土に親しめ

薄田泣菫

われ等はまたも太陽を取回した。

大空の高みから金粉をふり撒いたやうなその光が、下なる大地に氾濫して來る時、艸木は急に昨日の睡眠より覺め、しなやかな諸手を伸べて、輕く大氣の中に躍りさざめき、小鳥は花樹の梢に飛交ひながら、玉を轉ばすやうな美しい歌曲に謠ひ耽つてゐる。野原には、青葉が房やかに萌えてゐるなかで、仔牛や仔馬がさながら歡喜そのものの精であるかのやうに、身輕に跳舞し、また踴躍する。海にはまた、油のやうな春の潮が、きら〳〵と耀きながら、ひねも

春の牧場

すのたりのたりと搖れ動いてゐる。いづれを振向いても、大地は潑剌たる生氣が充ち溢れて、老いてなほとこしへに若い「大自然」が生々化育の大事業に到らぬくまも無い有樣だ。かうした季節に際會して、われらは先づ何を爲すべきであらうか。

いにしへの詩人のやうに謙遜な心を持つて、眼前に暫くの間もじつとしてはゐない。この生々の氣の動きを、歩みを凝視し、靜觀し、また讃嘆するのもあながち惡くはなからう。しかしそれよりももつと好いのは、自ら手を下して土に親しむことだ。

北歐のある文人は、自分のポケット Pocket ポケットにいつもいろ〳〵の花の種子を入れておき、到る處でそれを撒き散らして歩いたといふことだが、艸木は種子をばら撒いただけでは、立派な成長を遂げるものではない。それには種子を播くものが自ら土を耕し、培ひ、また水を灌ぎなどして、わが手の泥土に汚さるるをも厭はず、而倒を見てやるだけの用意がなくては叶はない。

われらが播種し、もしくは移植した艸木が、大地の生々の氣に刺激せられ、化育せられて、艸は艸として、木は木としての生命の發展を遂げゆくのを見て、言語に言ひつくし難い、甚深な感激と歡喜とに先づ心を躍らせる者は、誰よりも土に親しみ、手を汚してまでも種子を播いたもの、彼自らでなければならない。

あの磯濱の砂粒にもたとふべき小さな種子にもせよ、その生命をいたはり、はぐくみ育て、朝に夕に、その伸びゆく姿を見るほど、世の中に心清くも、賴もしく、また愛を感じさせられるものはないからである。

（獨樂園）

二　國史に還れ

徳富蘇峰
名は猪一郎
新聞記者
貴族院議員
帝國學士院會員
文久三年（一八六三）
熊本縣水俣生

「國史に還れ」。日本國の歴史は大和民族の系圖である、吾人が祖先の功科表である、日本帝國の寶庫である、日本國民の經典である。日本國を知るには、國史を通して知るより他に方便がない。國史は實に忠實な案内者である、信賴すべき指導者である。

吾人は歴史的に考慮せねばならぬ。すべての人類は、平等觀よりすれば皆同胞である。しかし、歴史觀よりすれば、すべての國は皆特殊の性格を具へてゐる。甲國と乙國とは同じでなく、乙國と丙國とは違ひ、而して丙國と甲國とも また同じでない。十箇國あれば十箇國の相違があり、百國あれば百國の差異がある。この特殊の國性を維持する上において、始めて獨立國の意義が完うされる。獨立國の本義は形式的に他の干渉を絶ち、我が自主の體面を保つのみではない、精神的に自主であらねばならぬ。詳かにいへば、精神的にその國性を把持し、保存し、開展し、發達させねばならぬ。

我が大和民族の誇は日本の歴史である。この歴史の中には、必ずしも悉く皆正しいこと善いことのみが滿ちては

ゐない、必ずしも悉く敬ふべく仰ぐべきことのみが溢れてはゐない。人間は決して神樣ではない。我が日本人の所作にもさま〳〵な過失もあれば、罪惡もある。しかし、總括していへば、日本の歷史は決して大和民族の恥辱史でなく、光榮史である。

いかに日本の皇室が、世界に比類のない有り難い皇室であるかは、國史が最も雄辯に之を語つてゐる。いかに日本の國民がその一旦緩急の際に處して、護國の精神に猛烈に且勇敢であつたかは、國史がその證人である。いかに大和民族の中に世界的偉人と比較して一歩も劣らぬ者、即ち世界的偉人と稱せられるに足るものを生じたかは、國史をよく讀む人の知るところである。即ち我が明治天皇の如き

五箇條御誓文
明治元年三月十四日　明治天皇天地神明に御誓約遊ばされたところの明治大政の御方針

帝國憲法
大日本帝國憲法明治廿二年二月十一日發布　七章七十六箇條から成る

株守
韓非子「宋人有ニ耕レ田者。田中有レ株。兎走觸ニ株、折レ頸而死。因釋ニ其耒一而守レ株、冀ニ復得ル兎。不可レ得。而身爲ニ宋國笑。今欲ニ以ニ先王之政一治ニ當世之民一。皆守レ株之類也。」

もその盛德大業は、國史の背景によつて始めて明白に、精詳に、剴切にこれを會得することができる。國史の背景がなかつたならば、五個條の御誓文の如きも、一種の雄快な文書たるに止るだらうし、帝國憲法の如きも、單に乾燥無味な一部の法文に止るであらう。

凡そ固陋頑冥な戀舊思想や、保守退嬰の島國根性や、若しくは詭激狂妄な赤化主義や、架空浮誇の模倣精神や、いづれも我が國史を閑却するからして起るのである。現狀を株守するのも國史を知らないが爲、現狀に不安を感ずるのも國史を知らないが爲、國民的自信力を失墜するのも國史を知らないが爲、自惚根性で醉生夢死するのも國史を知らないが爲ではないか。

「國史に還れ」とは、すべての國民が歴史家となれといふのではない。それには專門の學者がある。ただ日本國民として日本の歴史のその大いなる筋道を諒解せよといふのである。この歴史は日本の精神の存在して居る寶藏である。苟も國民的に生活し、且活動しようとするならば、まづこの寶藏に向かつてすべてのものを求めるがよい。

（國民小訓）

林野民三郎

二二　爆擊

林野民三郎

昭和七年一一月在滿獨立旅行中隊付として活動す

九時半、中隊長命令

「偵察、白野中尉。操縱、林野軍曹」。何と中隊長の聲のよいことか！　機關銃彈裝塡、爆彈も八發全部裝塡、不時着陸の用意には十連發拳銃、それから携行の傳家の寶刀も積んだ。

「班長殿、そんな赤錆で人間が斬れますか」。

「何だ、この野郎」。振返ると福田上等兵が笑つてゐる。

「これでも傳家の寶刀だぞ、錆びたりといへども越中守正俊、面倒くさくなつたら低空飛行で敵を撫で斬りにするんだ」。

正俊　京都五鍛冶の一人、慶長頃の刀工

準備完了、中隊長報告終り。愛機に搭乘すべく急ぐ途中を神崎中尉に呼び止められる。

「林野、行くのか。お前は今度はじめてだね。敵の陣地は……」。と親切に圖で說明してくださる。

「敵には昨日あたり高射砲が來たんだぞ。油斷するな。三分間以上直線飛行をやるんでないぞ」。中尉はおれの下

士候補時代の教官だ。だがこの時ほどしみじみと有難さを感じた事は無い。折も折、この親切な御注意である。さすがに暢氣者のおれも頭の下るのを覺えた。

午前十一時三十分、愛機の操縦杆を握り締めて一路北行、洮昂線を左方に注意しつゝ行く事二十分、嫩江を認める。青い線を描いて長蛇の如くのたくつてゐる。

高度千三百、昂々溪を南に約十キロメートル、友軍第一線を北へ約二十キロ。機はこの時敵陣地右翼中心部たる小興屯上空に在り、敵の機關銃、砲門を脚下に見る。陣地後部には百數十名を一團とする徒歩兵が圓陣を作つてゐる。思はず操縦杆に力が入る、だが……敵は撃たない、いさゝか物足りない。

滿洲國圖

洮昂線　洮南、昂々溪間

嫩江　滿洲國中央を流れて松花江に入る大河

小興屯　黑龍江省にあり

「撮影開始」あらしの前の無氣味な一瞬間、同乘者の聲が傳聲管を傳はつておれの頭に飛込んで來た。陣地前面、左側、右側、後面より、小興屯より大興屯に連る陣地の前面より——やがて機は東に向つて飛ぶ。

白野中尉は同乘席に立上る。寫眞器を機外に出して目標をねらふ、その時である……

パシ—敵高射砲の第一彈。

不氣味な音だ。炸裂は機體の右前下方約百メートル、續

いて第二彈、今度は左後下方、いづれも見事な濃藍色、いはゆる瑠璃色の煙輪を描いて空中に爆發した。續いて第三彈。

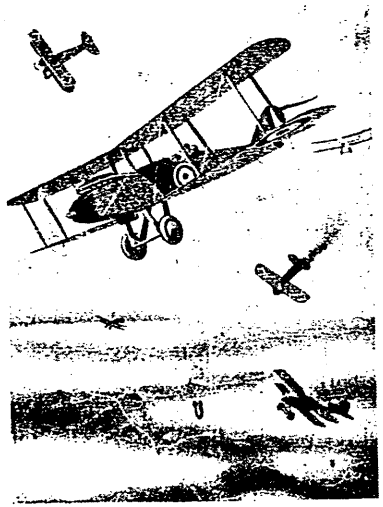
「みんな下だ、そして後だ、照準が悪いんだ、高度さへ保つてゐれば大丈夫だ」。まあ、撮影を濟ましてからの仕事だ。だが何處から擊つてゐるのだらう。首を機外に出して見たが分らない。第四彈、第五彈、どれも機體五十メートル以内に來るものは無い。

「撮影終り！　爆擊！」

中尉の力のある聲だ。よしやつてくれるぞ。

大興屯、上空進入、南より目標直上、高度千百、回轉を極度に詰める、垂直になるまで機首を下げて得意の急降下――二十五キロの第一彈を見舞ふ――約二百メートル、機首を起して御馳走の行方を振返る……

「しまつた！」陣地右方五十メートル位離れて、濛々と立昇る黒煙である。



第二彈だ、進入前と同じ。

「これでもか」

當つた、當つた、敵陣突角機關銃陣地だ、黒煙と共に木ッ葉微塵にけし飛んだ。

第四彈、第五彈、續けさまに敲き付けてやる、だが、敵もさる者、盛んに高射砲を擊つ。照準も比較的正確になつて來た。機の三十メートル以内に來るものもある。前後

左右に綺麗な瑠璃色の煙輪を浮かしてくれる。

豆をいるやうな小銃の音だ。陣地後方に圓陣を作つてゐる敵兵共が先刻から機體を狙つてゐる。

「今度はこいつ等、フライにしてくれるぞ」。出發の際に與へられた情ある教官の注意をおれは忘れない。不規則な蛇行を繼續しつゝ敵陣地後方へ――そこで一彈、彈の行方を見極める間も無く直ちに半上昇反轉、空中に半圓を描いて急降下に移る。――時速二百五十キロメートル、電光の如く突進。高度計は大きく動いて忽ち八百、七百、六百、思はず機關銃の引金に指が觸れる。

ダダダダダ……。小氣味のよい音だ。

機は下るだけ下つた。瞬間に水平飛行に移る、敵兵の頭上をかすめて陣地前方に飛去る。顧みれば我が爆彈は集團の中心より約三十メートルに爆發、附近の敵は騎馬諸共ぶつ飛んだところだ。

既に七發、殘るはただ一發。機首を左方百八十度に急旋回、機關銃を引く、故障だ、彈が出ない。蛇行飛行を繼續しつつ故障排除、大槓杆を引いたが駄目、分つた、小槓杆が閉鎖されてゐない。操縦杆を左手に持替へて右手を伸して小槓杆を叩いたら直つた。この間約三分、零下二十數度の上空におれの顔に汗がたら〳〵と流れてゐる。全身は電熱を通したやうに熱苦しい。仕方がない、襟卷を取つてやれ。お蔭で首が自由になつた。勇氣百倍だ。

よし！　愛機最後の奮鬪。日標直上八百、右腕に五尺七

寸の體力を籠めて上昇反轉。

機關銃は火を吐く、ダダダダ……

機首は目標に向つて垂直、唸りを生じて急降下――しまつた、三百メートル、下げ過ぎたか、狙ひ撃ちにされては百年目、蛇行だ、醉つぱらひの飛行機だ。やつと高度六百まで昇る、その刹那

もくつ

もくつ

高射砲彈二發、何れも機首の右方數メートル――機首左へ、瞬間約四十度傾斜した左翼、その直下で「もくつ」とまたもや敵彈の鮮かな炸裂。

やつと危機を脱した。銃彈はまだある、爆彈も最後の一發がある、もう一遍だ。ある限り御馳走してやらう。

戰鬪約三十分、機首を南に立て直す。機上ながら敵の戰死者に敬意を表する。日本武士の情である。名殘を惜むのか、敵の高射砲は未練氣に藍煙を空中に揚げておれ達を見送つてゐる。

友軍第一線某旅團の上空より敵情報告の通信筒を落す。戰友の打振る双手に爆音を以て答へる。かくて、一路根據地へ。時に一時十五分。

（東京朝日新聞）

正宗白鳥
本名は忠夫
小說及び戲曲作家
岡山縣の人

二三　信長と勝家

正宗白鳥

安土城内。信長の居室。襖には瓢箪から駒の出た繪が描かれてゐる。

銀燭まばゆきなかに信長は寛いだ服裝で、夕餐の膳に向かつて、盃を取つてゐる。

小姓、傍に侍する。

信長　其方たちも今日はくたびれたであらうな。

小姓　はい。……上様のお姿を見失つてはならないと思ひまして、無我夢中で驅けました。

信長　おれもやがて五十になる筈だが、まだ若い時分と違はないよ。今日は一つ根氣だめしと思つて、十里の道を一息にやつつけたが、さ程に疲勞もしなかつた。二十年前に桶狹間へ驅けつけた時のことが思ひだされる。

そこへ小姓源吾が入つて來る。

源吾　柴田修理亮様が只今參着いたされました。明朝お目通りがかなひませうかとお訊ねになつて居ります。

桶狹間　尾張國愛知郡

柴田修理亮「シバタシュリノスケ」　勝家、通稱權六、信長に仕へた。天正十一年三月秀吉のために賤ケ岳に敗戰自殺した

信長（喜んで）　修理亮が來たか。丁度いゝところだ。すぐに呼べ。……それから膳部は一先づ次の室へ下げて、其方達はおれが呼ぶまでそちらで休息しろ。

總見寺

源吾は膳部を持つて出て行く。

信長は長押から槍を取下して、幾たびかしごく。

そこへ柴田勝家（年五十二歳、無骨な身裝）が小姓に導かれて入つて來て、槍の手なみに感心しながら座に就く。

信長　よく來た。（槍を收めて）近う寄れ。今まで京で遊んでゐたのか。

勝家　上様の御威光をもちまして、京の町も靜謐になりましたので、此の度は、罷り出てました序に、神社・佛閣・名所・古跡

高天神城　遠江小笠郡高天神山頂にあつた

の見物をいたしました。それよりも御馬揃へのお催しは前代未聞言語に絶した御盛況で、老後の思ひ出、これに過ぎたことはございません。上様の御威光によつて、天下がかやうに泰平に相成りましては、わたくし如きは、もはや御馬前の御奉公をいたす場合もなくなりました。先日拜領いたしました姨口の釜に湯をたぎらして、北國の遲櫻でも眺めて、この年までの手柄話でも若武士に聞かせることにいたしませう。

信長　はゝゝ。其方は愚直だから、そんなことを言つてゐられて氣が樂だ。何が天下が治まつてゐる。

勝家　高天神城はまだ開城いたしませんか。

信長　いや、昨日家康から早打をよこして、あの手剛い城も今日か明日かの生命だと知らせて來た。あの城が潰れたら武田四郎も羽をもがれた小鳥同様だ。あの武田の小悴なぞ、おれは最初からさして心に掛けてはゐないのだが、中國の毛利勢には一骨折らされさうだ。四國には長曾我部がゐる。九州には島津が居る。腹に一物ある高野の坊主どもの始末も何とかしなければならない。

武田四郎勝頼　武田信玄の第三子　天正十年天目山に敗戰一族と共に自刃した　年三十七

毛利勢　毛利元就は領土備中・備後・安芸・周防・長門・因幡・伯耆・隱岐・出雲・石見に跨り勢威四國九州に及んだ

長曾我部　元親　土佐より起つて阿波・讃岐を奪ひ伊豫を征して其の勢威四國に振つた

島津　義久武略あり、九州の南半を征略した

北國の景勝　上杉謙信の養子

安土の春（舞臺面）

（急込むやうに言つて）北國の景勝などは其方に任せてゐても安心だが……

勝家　上様もお心弱うおなり遊ばしましたな。（微笑する）

信長　何だと。

羽柴　秀吉のこと
筑前　秀吉のこと

勝家　今日の上様の御威勢では、毛利如きは春の日に照らされる殘雪のやうなものではございませんか。（獨言のやうに）羽柴め、幸福な男だ。中國征伐を一手に引受けやがつて。

信長　筑前には筑前の役目があるのだ。其方はおれに代つて北國を押さへてゐてくれ。（勝家の顏を見詰めて）つい忘れたが、修理亮は今年幾歲になる。

勝家　五十二歲に相成ります。

信長　さうだつたな。おれも人間の定命が近くなつたのだ。

勝家　でも、上様は十年の昔と今日と少しもお變りにならないぢやございませんか。わたくしなどはこの通り頭が白くなりました。……でも、元氣だけは昔と變らないつもりでございますが。

信長　おれも元氣だけは、今時の若い奴等に負けないつもりだが、年齡は年齡だ。おれも夢幻の世の中に、五十間近まで無事に生きて來たのだが、年齡のことを考へると、何となく氣が急がれる。毛利や長曾我部をわが膝の前に匐ひつくばはせるのは、あと一年か二年か。おのれが定命に達するまでには日本統一の大業も略目鼻がつくと、おれは信じてゐる。……しかし、修理亮、このことは今日はじめて其方に話すのだが、おれは日本統一だけで滿足は出來なくなつてゐるのだ。高麗や大明に馬を駈けてゐる夢を、おれは毎夜のやうにこの頃見てゐるのだ。

勝家（驚いて）では上様は、御馬揃へを異國の都でお催しなされたいのでございますか。

愛知川　近江國小椋谷の山中に源を發し愛知、神崎の二郡の間を貫流して琵琶湖にそゝぐ

伴天連　往時我が國にキリスト教の傳つた時宣教に從事した人々の稱師父の意にしてパテレとよむべきをバテレンと昔ひならはしたのである

信長　異國と云つても、高麗だけではない、明だけではない。其の日も愛知川べりへ鷹狩に行つた歸りに南蠻の寺へ寄つて、伴天連どもの異國話を聞いたので、ひどく面白い思をしたのだ、その時から、南蠻の國々をも殘らず、おれの手のうちに收めたくなつたのだよ。

勝家（呆れて）　わたくしには、南蠻の國々は、佛者の說かれる十萬億土と同樣な遠い所にあるやうに思はれます。

信長　遠くも近くも下界の中にあるのぢやないか。

勝家　わたくしども雪の中に埋つてゐる田舍武士は、異國のお宗旨は薄氣味が惡いやうに思はれますが、上樣には御信心遊ばすのでございますか。

信長　日本の佛も異國の神も、おれに信心が出來ると思ふのか。しかし其方も明日にも伴天連に會つて聞いて見ろ、南蠻の坊主どもの話は、日本の坊主どもの古くさい話よりや、どれほど面白いか知れやしないぜ。おれは伴天連の說法はたびたび聞いた。……聞いてゐると、おれはその異國の神と角力を取つて見たくなつたのだ。異國の神の前に匐ひつくばつてお慈悲を願ふなんて以ての外だ。

南蠻屏風

勝家　それはわたくしも御同意申し上げます。角力なら、わ

たくしとても異國の神と取組んで負けることぢやございません。（快げに笑ふ）

信長（快げに笑ひ）おれも今日はうかと夢話をしてしまつたな。……さうだ。明日は其方が歸國いたすのなら、別れに何か御馳走しよう。誰かに舞はせて見せようか。

信長手をたゝく。源吾入つて來る。

信長　膳部を調へて來い。修理亮にも相伴をさせるのだから、その用意を言ひつけて來い。

源吾出て行く。

信長　この頃の京の町の賑はひを見た目には、安土の町はいくらか淋しく見えるのかも知れないな。淋しいといへば、おれは何ぼ歳を取つても樂隱居して公卿衆のやうに

安土「アヅチ」近江國蒲生郡天正四年信長此處に築城した

竹生島琵琶湖の北部にある島

歌でも作つて、泰平を樂しむ氣持にはなれないよ。一日でもじつとしてゐると氣が滅入つて來る。今日も長濱から竹生島まで五里の海上が退屈でたまらなかつた。小波も立たない鏡のやうな湖水は、見てゐて退屈なものだぜ。龍卷でも起ればいゝと思はれたよ。だから南蠻の坊主どもが、世界のはてから萬里の波濤を凌いで來た話を聞くと、おれの心が湧立つのだ。

京都南蠻寺の遺鐘

勝家　上樣にお目通りいたすたびに、勝家の全身にも活氣が湧いてまゐります。

そこへ小姓たちが酒肴を運ぶ。

信長、小姓をして勝家に酒をすゝめさせる。勝家鯨飲する。

信長　權六といつてゐたその頃の勝家は、おれの弟の信行に荷擔して、おれを殺さうとしたのではないか。この勝家も、三十年の昔にはおれに手對つて、おれを九死一生の危い目に會はせたのだぜ。おれは負けなかつた。おれが勝つたからこそ、勝家も頭を剃つて侘に來た。母上のお取成しで罪を許して、おれの臣下に加へてやつた。それが今では織田家第一の忠臣になつてゐるのだから不思議ではないか。……其方たちはまだ若いから知るまいが、これが世の中だ。おれが強かつたからだ。おれに力があつたからだ。おれの力にひゞが入つたら、おれも最後だ。おれの足許からでも敵が飛出して來るのだ。

勝家　若い昔のことを仰せられてはわたくしの身體にも冷汗が流れます。大罪はお許し下された上に、三十年の間須彌大海にもたとへられぬ御高恩を蒙つたわたくし、未來永劫、弓矢八幡、日本はおろか、南蠻の神にまで誓をかけ、上樣に忠勤を怠ることはございません。この勝家を筑前などと御同樣に御覽遊ばされては、勝家も御恨に存じまする。

信長　舊弊な言葉は止めにしろ、おれは誓言はきらひだ。たつて誓ひたければ、織田信長にかけて誓へ。佛も神も踏みにじつた信長の力にかけて誓へ。力のあるうちは神と角力の取れる信長だ。力の衰へた信長は、藁人形の內大臣だ。鳥おどしにしきやなりやしないよ。はゝゝゝ。

室町の案山子將軍の喜びさうな言葉は止して、今夜はうんと飲め、おれが酌をしてやらう。醉つて槍踊でも踊つて見せろ。

信長、勝家に酌をする。勝家感謝して受けて快く飲み干す。

勝家　冥加にあまるおもてなしのお禮として、わたくしが無骨な舞の手振を御覽に入れませう。

信長　修理亮の舞は珍しい。舞つて見せろ。

勝家　はつ。

勝家立つて謠ひながら舞ふ。

信長感に堪へ恍惚として見てゐる。

（安土の春）

土井晩翠
名は林吉
英文學者
詩人
第二高等學校教授
仙臺の人

二四　造化のたくみ

土井晩翠

あゝうるはしきあめ地の、
たくみをいかにたゝへまし。
月日めぐりて年逝きて、
かはるいくその景色ぞや。

春の歩みの著くところ、
地に花かほり草いろひ、
はるのいぶきの行く所、
そらに蝶まひ鳥うたふ。

清きは夏のゆふ河原、
涼しき眺見よやとて、
空に月照り、風そよぎ、
地に露結び、水ながる。

しぐれも雲も時めきて、
秋のゆふべの色よはた、
谿は紅葉のあやにしき、
峰は友よぶ鹿のこゑ。

冬はあしたのあけの色、
色なき空に色ありて、
雪のこずゑに梅薫り、
梅の梢に雪かゝる。

あゝいつくしきあめつちの、
たくみをいかにたゝへまし。
同じひと日の空合も、
遷るいくその眺ぞや。

〔晩翠詩集〕

二五　樹の根

和辻哲郎

和辻哲郎
哲學者
京都帝國大學教授
兵庫縣の人

松の樹に圍まれた家の中に住んでゐながら、松の樹の根が地中でどうなつてゐるかは餘り考へて見なかつた。美しい赤褐色の幹や、わりに色の淺い清らかな綠の葉が、永い

馴染てある松の樹の全體であるやうな氣持がしてゐた。雨が降ると、幹の色はしつとりと落ちついた、潤のある鮮やかさを見せる。緑の葉は涙に濡れたやうなしをらしい色艶を增して來る。雨のあとで太陽が輝き出すと、早朝のやうな爽かな氣分が、樹の色や光の中に漂うて、いかにも朗かな生の喜がそこに躍つてゐるやうに感ぜられる。折節かはい〻小鳥の群が活き〳〵した聲で囀りかはして、緑の葉の間を樂しさうに往き來する。――それが私の親しい松の樹であつた。

しかるに、或時私は松の樹の生ひ育つた小高い砂山を崩してゐる處にたゝずんで、砂の中に喰込んだ複雜な根を見ることが出來た。地上と地下との姿が何とひどく相違してゐることだらう。一本の幹と、簡素に並んだ枝と、樂しさうに葉先を揃へた針葉と、――それに比べて、地下の根は、戰ひ、もがき、苦しみ、精一杯の努力を盡くしたやうに、枝から枝と分れて、亂れた女の髮の如く、地上の枝幹の總量よりも多いと思はれる太い根、細い根の無數を以て、一齊に大地に抱きついてゐる。私はこの樣な根が地下にあることを知つてはゐた。併しそれを目の前にまざ〳〵と見た時には、思はず驚異の情に打たれぬ譯には行かなかつた。私は永い馴染の間に、このやうな地下の苦みが不斷に彼らにあることを、一度も自分の心臟で感じたことがなかつたのである。彼の苦みの聲を聞いたのは、時折に吹く烈風の際であつた。彼の苦しさうな顏を見たのは、濕りのない炎熱の日が一月

以上も續いた後であつた。併しその叫び聲や萎れた顏も、その時さへ過ぎれば、すぐにもとの快活に歸つて、苦みの痕をめつたにあとへ殘さない。而も彼らは、我々の眼に祕められた地下の營を、一日も怠つたことがないのであつた。あの美しい幹も葉も、五月の風に吹かれて飛ぶ綠の花粉も、實はこの樣な苦勞の上にのみ可能なのであつた。

この時以來、私は松の樹のみならず、あらゆる植物に心から親みを感ずるやうになつた。彼らは我々と共に生きてゐるのである。それは誰でも知つてゐる事だが、私には新しい事實としか思へなかつた。

私は高野山へ登つた。さうして不動坂にさしかゝつた

高野山　和歌山縣にある靈山

不動坂　京口即ち京都方面の登山口から登り一里の坂その上に不動堂がある。

弘法大師　空海　眞言宗の開祖　承和二年歿　年六十三

金剛不壞　金剛は金屬中の最も剛堅なもの　佛の身を金剛不壞の身などといふ

時に、數知れず立並んでゐるあの太い檜の木から、何とも言へぬ莊嚴な心持を押しつけられた。

なるほどこれは靈山だと思はずにはゐられなかつた。

高野山の檜

この地をえらんだ弘法大師の見識にもつく〴〵敬服するやうな氣持になつた。

それは外郭に連なる山々によつて、平野から切離された、急峻な山の斜面である。幾世紀を經て來たか分らない老樹たちは、金剛不壞といふ言葉に似つかはしいほどな、どつしりとした、迷のない、壯大な力强さを以て

天を目指して直立してゐる。さうして樹々の間に漂うてゐる生々の氣は、ひた〳〵と人間の肌にも迫つて來る。私は底力のある興奮を心の奥底に感じ始めた。

私の眼はすぐに老樹の根に向かつた。地下の烈しい營は既に地上一尺のところに明かに現れてゐる。土の層の深くないらしいこの山に育つて、あの亭々たる巨幹を支へる爲に、太い强靱な根は力の限り四方へひろがつて、地下の岩にしつかりと抱きついてゐるらしい。あの巨大な樹身にふさはしい根は一體どんなであらう。殊に相隣つた樹の根と入りまじつて、薄い地の層の間に複雜にからみ合つてゐる有樣は、想像するだけで我々に驚異の情を起させる。確かに烈しい生の力の營によつて、殘る所なく包まれてゐるのである。我々はそれを肉眼によつて見る事は出來なかつたが、しかし一種の靈氣として感ずることは出來た。隱れた努力の威壓が、神祕の影をさへ帶びて、我々に敬虔の情を起させずにはゐなかつたのである。

私は老樹の前に根の淺い自分を恥ぢた。さうして地下の營に沒頭することを自分に誓つた。今氣づいてもまだ遲くない。

成長を欲するものはまづ根を確かにおろさなくてはならぬ。

上に伸びることをのみ欲するな。まづ下に喰入ることを努めよ。

早年にして成長のとまる人がある。根をおろそかにしたからである。

四十に近づいて急に美しい花を開き、豐かな果實を結ぶ人がある。下に喰入ることに沒頭してゐたからである。

私の知人にも、理解のいゝ頭と、感激の強い心臓と、よく立つ筆とを持ちながら、まるで勞作を發表しようとしない人がある。彼は今生きることの苦しさに壓倒されて、自分のやうなものは生きる値打がないとさへ思つてゐる。しかしそれは彼の根が一つの地殼に突當つて、それを突破する努力に惱んでゐるからである。やがてその突破が實現された時に、どのやうな飛躍が彼の上に起るか。——私は彼の

地殼　地球外部の岩石で複雜に構成せられた部分

前途を信じてゐる。根の確かな人から貧弱な果實が生まれる筈はない。

古來の偉人には雄大な根の營があつた。その故に、彼らの仕事は味はへば味はふほど深い味を示してくる。

現代には、たとへ根に對する注意が缺けてゐないにしても、ともすればそれが小さい植木鉢のなかの仕事に墮してゐはしないか。いかにすれば珍しい變種が出事るだらうかとか、いかにすれば豫定の時日の間に注文通りの果實を結ぶだらうかとか、すべてがあまりに人工的である。限られた土壤の中で纖細に發達した根は、深い大地に移されても、自由にその手足を伸ばすことが出來ない。

天を衝かうとするやうな大きな願望は、いぢけた根からは生まれる筈がない。

偉大なものに對する崇敬は、また偉大な根に對する崇敬であることを考へて見なければならぬ。

（偶像再興）

二六　死して惜しまるゝ人となれ

嘉納治五郎

嘉納治五郎
甲南と號す
前東京高等師範學校長
貴族院議員
兵庫縣の人

生まれて而して長じ、長じて而して死す。禽獸かくの如く、草木かくの如く、人間亦かくの如し。されば人として禽獸草木と異ならんと欲せば、生まれ甲斐ある人とならんことを要す。予は更に前途有爲の諸子に向つて、死して舉國の悼惜を受くる人たらんことを望む。

人生まれて呱々の聲を發するより、長じて一個の成人となり、自營自活して世に立つに至るまで、他より受くる所の恩德一ならず。これを近くして、まづ父母の鴻恩あり。我等の生まるゝや自營の道を知らず、自活の道を知らず、ただ泣くことを知り、笑ふことを知るのみ。この間晝夜を問はず、寒暑を論ぜず、心身の疲勞を忘れ、千辛萬苦以て我等を保育し、以て我が成長を遂げしむるものは、豈我等の父母にあらずや。これに次ぐに師長の恩あり。我等が僅かに黑白を辨ずる頃より、長じて社會に出づるに至るまで、我に誨ふるに事理を以てし、我に說くに道德を以てし、必要なる學術上の知識を授け、身體保全の法を講ぜしめ、我等

嘉納治五郎

をして將來世間に獨立する基礎を成さしむるものは、豈我等が師長にあらずや。

更に又至尊及び國家の恩あり。至尊は仁慈なる大御心を以て臣民を愛撫し、宏大なる聖德を以て國家を統治し給ひ、國家各種の機關は生民の安寧を維持し、その福祉を增進し、兇惡を正し、不逞を罰し、以て我が父母師長をして我等に對する慈愛薰陶の務を完うせしめ、又我等をして危難を憂へずして安全なる發育を遂ぐるを得しむ。然らずんば、我等は亂離塗炭の苦みに陷らん。我等の安全なる發育を遂げて一個の成人となるは、實に此等數者の恩あるに由る。然らば則ち我等が成人の後に於て、此等數者に酬ゆるは人間當然の義務にあらずや。

然れども人間の生涯は實に區々たり。或はその修養の時期に當りて、懶惰遊蕩の間に貴重なる光陰を送り、體軀徒らに長じて、當に自營自活以て我が生育の恩に報ゆべき時に至るも、無爲無能その父母の恩に報ゆること能はず、その師長の恩に酬ゆること能はざる者あり。況や國家が生を成す所以に酬ゆることをや。朝に起きて而して食ひ、夕に食うて而して眠る。かくの如くにして老い、かくの如くにして死す。これ所謂醉生夢死する者にして、實に國家の蠹賊、人間の最下なるものなり。

又その無能かくまで甚だしきに至らず、何等か一種の事に從ひ、國家に對して多少の裨益をなし、以て自活の道を求め、僅かに父母を養ひ、自ら衣食して一生を送る者は、これを

前の醉生夢死する者に比すれば、勝ること萬々なりと雖も、かくの如きは僅かに自ら受くる所の恩に酬ゆるに過ぎずして、その一生の經營事業の永く後世に德し、その流風遺韻の遠く子孫を動かすに足るものなし。かくの如きは我等の理想とすべき所にあらず。

我等は人間天賦の能力を善用し利用し、その畢生の事業は以て我等が父母・師長・國家・社會に負ふ所の鴻恩に酬い得て更に餘裕の綽々たるものあり、後世子孫をして永くその餘澤を受けしめ、國家は我等を得て一段の進歩をなしたることを、長へに追憶せしめんことを期すべし。我等が前途有爲の少壯諸子に待つ所のものは、實にこれに外ならず。

それ生きて一鄕の爲に功ある者は、死して一鄕の爲に惜しまれ、一郡の爲に盡くせる者は、一郡の爲に哀しまる。若しそれ、その事業國家全體の進歩を助成し、その忠誠よく闔國民に認めらるゝ者に至りては、その事業の何たるを問はず、その人の存否は國家の進運に關すること甚だ大なるものあり。こゝを以てその人一度逝くや、國を擧げてこれを惜しまざるはなし。嗚呼天下の廣き、逝く者は日夜にこれあり、而してその死の天下に知らるゝ者果して幾人かある。

教育之事天下莫偉焉、一人德致廣加萬人。一世化育遠及百世

甲南

少壯の諸子よ。諸子の前途は遼遠なり。遼遠なりと雖も、一生の覺悟は即ち今日より定め置かざるべからず。知

教育之事天下莫偉焉一人德致廣加萬人一世化育遠及百世

甲南筆蹟

らず、諸子は死して人に顧みられざる人とならんとするか、一鄉一郡の爲に惜しまるゝ人とならんとするか、抑亦舉國の悼惜を受くる士とならんと欲するか。

（國士）

改訂中等新國文　卷四　終

昭和六年七月三十日　印刷
昭和六年八月三日　發行
昭和六年十一月廿二日　訂正再版印刷
昭和六年十一月廿三日　訂正再版發行
昭和九年七月十日　訂正三版印刷
昭和九年七月十一日　訂正三版發行

改訂中等新國文
定價　卷一、二、三、四、五、六、七、八、九、十　各金六拾錢

編者　藤村作
編者　島津久基
發行者　東京市牛込區拂方町二十七番地　佐藤正叟
印刷者　東京市京橋區銀座四二丁目三番地　高橋郁

東京市牛込區拂方町二十七番地
振替口座東京二九五〇七番
至文堂
電話牛込(34)(四四五五番)(四四五六番)

(三協印刷印刷株式會社印刷)

複製不許